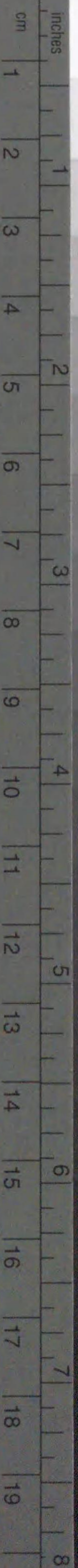


Kodak Gray Scale



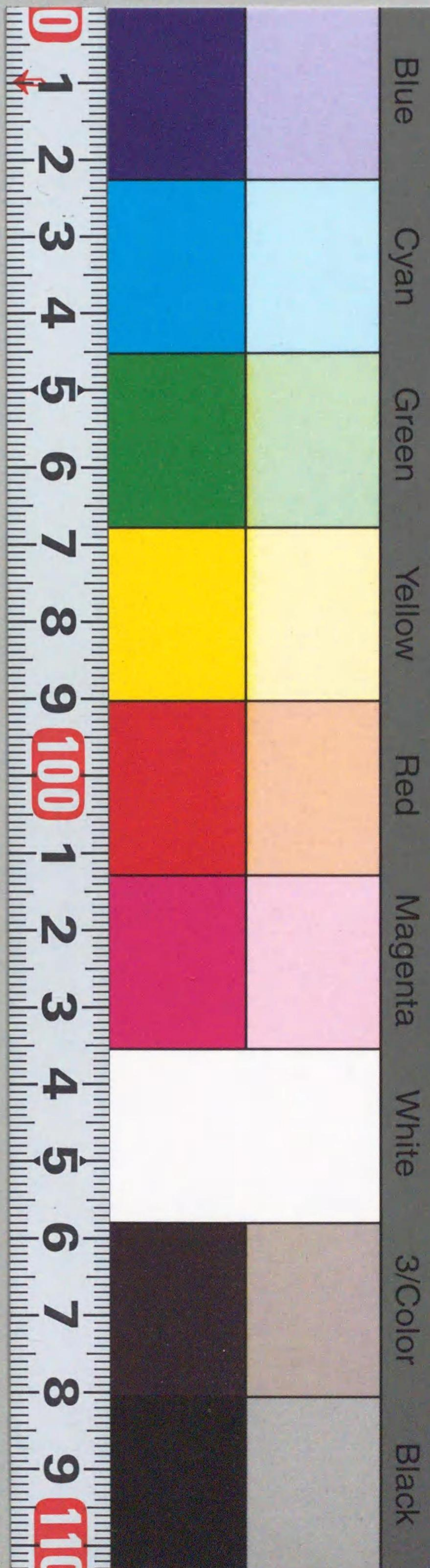
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

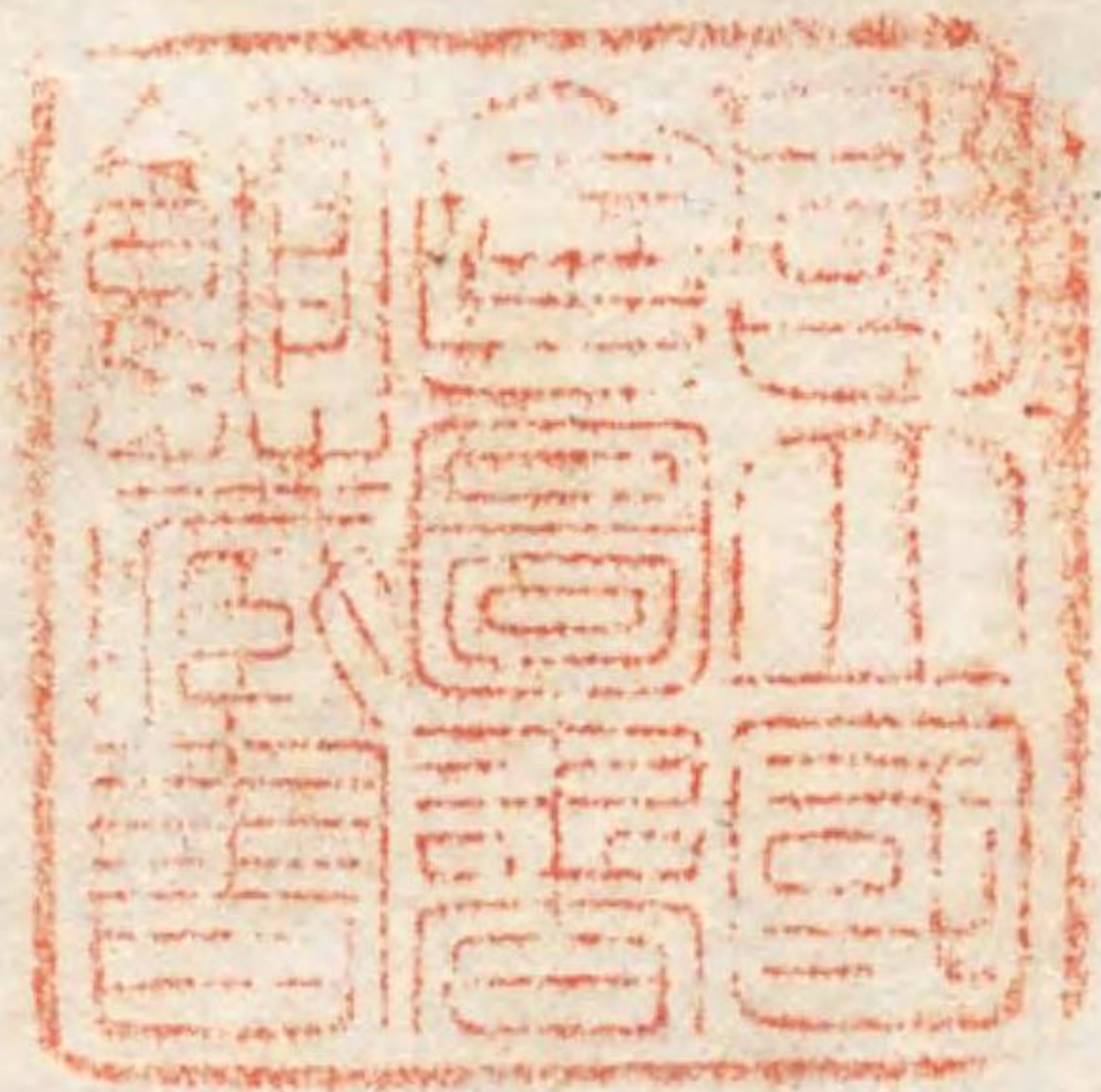


增補雅言集臨見

四十

813.6
I 619a
Wxg

813.6
I 619g
Nrd



691356

増補雅言集覽卷之四十

石川雅望集
中島廣足補

○己の部

〔七〕來(万)九、一いもがためわれ玉ひろふおきべかる玉よせもてこおきつちらか
枕廿九、これよ白からん所ひさものいれてもてこ(後撰)戀五、今にあまうてこそ人も
うさていふかりといひいどして侍りければ(新古)雜中、山里の人こさせととおも
いねどとるゝことぞうとくかりゆく(榮)月の宴十、あふ坂もてのゆきゝのせ
きもるむたづねてとひこさかばあへさト(大和物)六、此子の顔のいとをかいとかり
ければめをとめてその子こちるてこといひければ(伊勢物)三、このたびいきてい
又のこととおもへるけしきかれバ(古)戀四、よみ「月夜よ一夜よ」と人よ告やらバ
あてふよゝりまたせしもあらせ(宇治拾)十四、さゝることかんにんと思ふ
今のちど時かひさせこといひければ(同)十四、法師をらよびぐしてこと給ひけれ
バ(伊勢物)廿七、こざりける男(大和物)廿四、たゝかよとひたてまつりてことかんの
さまひつる(古事記)下、母智豆許麻志母能云々(後)戀四、いつかのねよあさかへ

りこゝかどものべのあさぢの色づきまけり補(うつろ 樓の上)上ノ上ふをまもてあ
とて

○コ行ク源ウきふね三 参りこまほしく

○コん 行イ勢物廿三 段 からうとてやまとへこんといへり伊勢集八玉葉秋上ま

つむしもあきやとぬかり秋の野誰よふとてか花見もこん古戀三「かざりか

き思ひのまゝよよるもあん夢路をさへに人のとがめト遠鏡云コレハユカン也

○コ一 源若紫廿五 一面かけの身をもたかれ山さくら心のかざりとめてこゝかど

同未摘廿 ちほたのこゝかひなくて過行古貫下山高と見つゝわがこゝ櫻花風

のこゝろよまをせべらかり同同「春のゝまかあつまんとこゝものを散かふを
かに道のまどひぬ

○コさせ新古雜中山里の人のさせととおもねととるゝおとぞうとく成ゆく

伊勢物六十八段 八段 こそさせけり夫十一「おもふ人こそさせまほしき所をかみかきが

さらの萩のさかりの

○コで 不枕十三 来 ある人のいミドう時あひさる人の聳まかりて一月もそろゝ

しうもこでやみよゝかばをべていみトういひさわぎ同八ノ見ておと仰られけれ
廿六

バ見て歸りまゐりて

○コせ和泉式部集上「君のこせまゝゝとゆるとらそをはいけともいまいい

トとぞおもふ

○コ子後拾哀傷和泉式部 「とゞめおきてをを哀とおもふらんこゝまさるらんあい

さりけり源桐つは三 三きよらかる玉のをのあまこさへうまれ給ひぬ同帶木廿六あ

るトのこどもをかへけよてあり同廿七 此れ左衛門のあみの末の子よて同浮舟

八をべて此子のこゝちをささゝして侍り同野わき五 風の音をも今のりへりて

わかきこのやうはおぢ給ふ

○コ子 人の名源こてふ五 此さふらふみることをもとよりとりのまへりけるつた

へよて侍りける補大和物二 此むせめあねあさるあやつこといひて有り同

このおとゞのもとよよふこといふ人ありなり

補子 いざことも たがこぞ ナド万代能因 「みちのくののぶの鷹を手よをる

て安達の原をゆくのさが子ぞ

○コ故源玉葛初右近心夕顔 故君物一給はまりり同榊七 故姫君を引よぎて云々

故院の御世よそわがまゝよおせを同未摘三こひさちのとこの末にまうけて

いみづうかーづき給ひ御むすめ(土佐日記)下故惟喬のみこの御もと故在原の
業平の中將の云々(源柏木)卅ことの御けそひ(同桐壺)十故大納言今はとあるま
で云々うへをくいさめおくれ侍りーりさ

〔鳥ノ拾〕物名「鳥の子のまごひを、がらさちていぬかひのまゆるのをもりある
べー(伊勢物)八段「鳥の子を十つ、十のりさぬともおもそぬ人をおもふものりの

〔蠶拾〕戀「さらちねのおやのりふこのまゆをもりいぶせくもあるういもよあひ
ぞで(和名)十説文云蠶和名加比古一虫吐絲也俗爲蚕字(伊勢物)十三「かりくよ

戀よーかむくいこにをなるべりりたる玉のをさのり(万)十三「かりくよ人とあ
らむさくまこよもからまー物を玉のをさりり

〔鈎枕〕九ノとすれもかうのあけさるこのまをやりなるもけざやりよまゆ
〔籠赤染集〕一身のこよ心のをらよ飛鳥のこよこもりたる心ちこそすれ(源浮

舟)五ちひさきひけを云々(同)六此このかねをつくりて色どりたるこかりけり
(同さわらひ)初わらびつくくーをりきこにいれてこれのわらひへのくやうト

て侍るまつりありとて奉れり(同帯木)廿かえたるさぬどものあつをえさるおほい
あるこようちりけて(拾)物名「のぞみれば春めきよけり青つゝらこよやくま

一若なつむべく

○むーのこ(源の目さ)十虫のこども露りませ給ふありけり云々色々のこどもと
もてさまよひ

○あらこ(古事記)中取其伊豆志河之河島之節竹而作八目之荒籠(竹取)下此あか
かひとこぞちて人皆ちりぞきてまめからん人ひとりをあらこにのせをゑて綱をか
まへて鳥の子うまん間綱をつりあけさせて云々あらこよ人をのせてつりあけさ
せてつさくらめの巢よ手をさーいれさせてさぐるよ物もなーとまうす云々われの
ぞりてさぐらんとの給ひてこよのりてつられのほりて云々

〔期空穂藏開〕上、かゝるほどに子うとたまふべきをちりくかりぬれば(源總角)一
「りさ戀やくるーかるらん山がつのあふでかーとひみえぬものから(大和物)六か
かる山の末よこもり侍りておはんをこよととおもう給ふるを(蜻蛉日記)二かくて
あつきほどをりとおもふかりといへいこもかくおぼすよこそあかれ云々(同)中、
長哥りつ夢りといひかからあふべきをかくかりぬとや云々(同)上、「ふる雪よつ
もる年をばよそへつゝきえんこもかき身をぞうらむる(同)中、「鶯もこもかき物や
思ふらんこな月もてぬねをのこぞかく(宇治拾)十二、加茂祭、そのでちりくかり

て(十訓抄)春六「時もあれいさを此風のみよれるをよさへ人のうらむべしやの

(拾)兼盛「ふつつけしよどのわたりをけさみればとけんでもかくこほりしよけり

(同)戀五よみ「もえもて、灰とありなん時よあそ人を思ひのやまんでよせめ(古)

諧「人こふることをおもよ、よかひもてあふをかきこそわびりかりけれ(万代)

夏土御門院「くるとあくど、けんでもあき氷室山いつりなぐれ、谷川の水(伊勢物)

段廿六「いりでかくあふをかたよありよけん水もらさどとむまびりものを

で御(大和物)三おろいでいささいの宮よ少將のこといひてさふらひけり

で碁(拾)雜天曆御時云々帯をりけて御碁あそべりける負奉りて御數おそくなり侍

りけれバ帯をりへ給ふとて(源あふひ)四十碁うちへんつきあど給ふ(同)七十

けふの碁もうたでさうくしやとて(同)手習)卅かの御碁ぞいとつよりり云々つ

ひよ僧都をんふたつまけさせ給ひ

おいさなど(催馬樂)あさどとりやこいさかたをめかけたりと見る迄に云々あざ

り柳 補こいへ(小家(榮布引)九せさくてもみぞやうのどんかどむりひびたりのおいへども

とらせ給ふ

補こいまろび(万)九ノ反側あしせりしつ、(同)九ノこいまろびこひりもをらん

補こいふを(万)十七、長哥うつせみのよれ人あれはうちあびきとこよこいふ(同)

十七、とこよ己伊布之 廿六、近頃トイ(源東や)十まごころの御徳なきやうかれど(同)十守苔此ころの御徳

などの心もどかりらん事のかの給ひを

ころ頃(千載)上秋頃まりりわさりて云々(同)中春頃久我よまりれりたるついでよ

(詞花)上神無月の廿日頃よ時雨のしける日(拾)戀秋頃忍びてまりらんと男のいひ

けれバ(千載)下春やよひのつごもりの頃云々(源帯木)廿さて又おかト頃まりりよ

ひし所(古)戀四「敷島のやまとよはあらぬから衣ころもへせしてあふよしもが

な(源寄生)六十「そのころほひのどやりにもおそしまさせとうけ給そり(同)松

風)七秋のころほひなれば物のあそれとりかさねたるこ、ちして(千載)下保延の頃

やひ云々(とりりへ)四ノ春の頃(同)七冬ノ頃(源)上五夏頃なやましく

給ふを(同)す、虫)初夏頃をちまの花のささりよ(詞花)下雜その冬頃いひつりまけ

る ころほひ(源帯木)六受領といひて人の國のおとよか、づらひいとあみて品さざま

りたる中よもまふさぎまゝ有て中の品のけしうのあらぬえりいづべきころなり
あり(源 夕のほ)八いと志のびてさつきのまろなり(伊勢物)九十秋たつころ
ひに六段

ころお(宇治拾)十五、鞠のてどくをざれの中よりまろび出させ給ひて

補おろおす(万)二とせれば玉藻の如くころおせを川藻の如く

おろく(夫)卅四、衣笠内大臣「やをとめのふるてふ鈴のころくまをのやしろの宮る
せりとそ(堀次)俊頼「いのることなをのをやしろころくまをせよよく口を
しるかり

補ころも(枕)四十。乞食 老たる女のふふのいとくす、はたるかりをりまの
つゝとりやのやうまほそくとどきをおびより下五寸をりあるころもとやい
ふべりらんおあどやうまを、けたるをきて

ころもまこ(源)かけろふ(十)衣箱一よろひ櫛の箱一よろひ(同)玉葛(四十)御ぞびつ衣
まことまよいれさせ給ひて(同)末摘(卅)つゝみま衣まこのおもりかまことまいある

ころもまへ(源)あふひ(卅)まび色の直衣さぬきうはらりま衣がへして(同)明石(十)
四月まなりぬ衣がへの御さうぞく御帳のかたびらかとよあるさまにいづ(六)

帖(一)拾(夏)重之「花のいろよそめいたもとのをしければ衣がへうきけふまもあるり
か

補ころもかりがね(金葉)秋(公實)「いもせ山とねのあらやさむらん衣かりがねを
らまなくあり(續後拾)秋上(爲氏)「秋萩の花咲ぬらわがせこころもかりがね今さあ
くかり(同)同(爲道)朝臣女「何ゆゑりきつ、かれこ秋風まころもかりがねのみまくら
ん(新古)朝臣女「風さむといせの瀟蕩さけゆけば衣かりがね浪まかく也(新續古)秋下
行「身まさむくあきりせふきぬうべこそ衣りりがね今朝のあきけれ(新拾)秋下
家「水ぐまのをり此葛葉をふく風まころもかりがねさむくまかり(壬二)上「さえ
のゆるつちのひぐまよや寒まころもかりがね空まかり

ころものまま 衣の珠(法華經)五百弟子受記品不覺內衣裏有無價寶珠 云々(赤染集)
一「けふさくを衣のうらの玉にしてさちまあるともりぞの尋ねん(後拾)左衛門
「いりぞりく花の袂をたちりへてうらある玉をわすれざりけん返中一かけてど
ま衣のうらま玉ありとちらで過けん方ぞくやま(同)同。高階成順世をそひき侍
もとよりかこせ侍「けふとも思ひやいせあまころも涙の玉のかゝるべいと
かへし 伊勢大輔「おもふまもいふまあまることかれや衣の玉れあらざる、日(新古)

釋教 五百弟子品のころを「玉りけし衣のうらをかへてぞおろりかりけるこ

源信 ころをぞける(堀初)霜季 「人めよはあられたをける我袖の衣よつゝむ玉りとやと

る(拾玉)「草枕りへを衣よおく露をうらの玉とや人のとるらん(後拾)雜三、加賀

「いりぞりく花の袂をさちりへてうらある玉をわすれざりけん(金葉)雜下「吹り

へは鷺の山風なりりせば衣のうらの玉をまゝや(同)同縁 「いりよして衣の玉と

しりぬらんおもひもりけぬ人もある世よ(後拾)釋教 康資王母 「さきがたきみのり花

よおく露ややがて衣の玉とあるらん

ころものくび(堀次)俊頼 「おもひいでバ心をりりよりよそして衣のくびよことあ

もらしそ

補 ころものをそ 衣の(續後拾)春(万代)春上、よみ 人いらす 「君がため衣れすをぬらしつゝ、

春の野よいで、つめるをりかぞ(同)好忠 「根芹つむ春の澤田よおりさちて衣のす

それぬれぬひぞかさ(古)秋上、よみ 人いらす 「とがせこが衣のすを吹りへしうらめづらし

き秋の初りせ

ころもで 衣手(万)十一、「あまかくよゆふけをとふとぬさよおくよ我衣手の又ぞつ

ぐべき(古)春上 仁和帝 「君がため春の野よいで、若菜つむ我衣てよ雪のふりつゝ、

○からころも かの部 出す

○やしのころも(万)十一、「くれあるのやしの衣あさなさをあるといれせいで

やめづらしも

○ふるころも(万)十一、「ふるころもうつて一人あまの世のたちくるときよもの

もふものぞ

○こそめのころも(万)十一、「くれあるのこそめの衣いろふりく染まらるわす

れかねつる

○志ほやまころも(万)十一、「志賀のあまの塩やまころもをぬれどこひとふもの

いよせれりねつも

○すりころも(万)十一、「そり衣けりと夢みつうつゝよいつれの人のことりり

けん

ころを(殺)夫(卅)菅万(寛平御時后宮の哥合)よみ人 「かぎりかくふりきおもひを

のふれバみをころれよもおどらざりけり(伊勢集)八をさく院の鶴を人のころよ

もあらせうちころりたりける(源)浮舟)五十「それよねたみてつひは今のをバ殺して

いとぞり(神代紀)下ノ有逆命者即加斬戮(空穗)嗟賦の院)中、五「ちをぬきてころ

よくくるものりとおぼして(和泉式部集)下鳥の聲よそりられていそぎいで、よく
かりつればころゝつとておねふみよつけて給へれば「いゝゞとれわれこそおもへ
あさかゝあさきさのせつる鳥をころせば

こは 是ハ(狹)廿四下「かかゝさもおそれる君よつきとて、こはまたおもふものどい
らぬを(源 若紫)卅六「あゝわりれうらのとるめのかたくともこのたちながらかへる

をみり(狹)四ノ中云々このゝるべき中のちぎりかゝなどうは我心のつらきぞ
うゝといひやるべきりたあゝ云々(源 帚木)四「あさましうこそいりなる事ぞと思ひ

まどそるれど(同 若紫)四十「まろもおなト人ぞとてかきいさきて出給へバ大輔少納
言などこそいりよと聞ゆ(同 檳柱)四十「あかうさてやこそなぞとひきいるれど

補(後拾) 哀傷土御門 右大臣女「わりれよ一人にくくもあらなくよいりよふるまふさゝがよ
ぞこの(宇治拾)「この鬼どもをどりあがりてこのなよとささぎあへり

こそいひ 強飯(うつろ 菊の宴)下六尾花色のこそいひ(和名)十強飯史記云廉頗強飯
云々和名古八伊比(源 末摘)十御かゆこそいひめしてまらうどよもまろり給ひて

補(こむりま) 榮 あさみどり殿の小袴きてあゝささき給ひて
補(こむら) (好忠集)「山里の梅のこむらよ春をりりいりてをらん花も見がてら

補(こむん) 碁盤 (宇治拾)三こむんのあゝのいりりさゝあがりたるよ

こむらうち(枕) 四聲引つくりひて佛の御弟子よさふらへバ佛のおろよと申を
を此御さうたちのをいし給ふといふ花やうよとやびりかりかゝる物に打くんとた
るこそあされかれうたても花やうあるうかとて云々(源 手習)四。大ト 僧都の御坊

よ御覽せさせ奉らむや
こそぎ 小萩(源 桐のほ)十「あらしきせむせぎよかたのりれよより小萩がもとをま
づこゝろあき

こそい (源 夕霧)十かく心でまけれさいまのせりれ給ふべきあらねバ(榮 衣の珠)「
いとゞ御物のけへこそくかりまさりければ(同)九「さまぐの御もの、けさもい

ミトウこそい(源 丑のあ)十八此文の詞いとうさてこのくよくはかるさまを(竹取)
下。勅使來ル 所=翁詞 くちをしく此をさあき者いこそく侍るものにて對面をまトきと申を

補(枕) 五やをらまろびよりてさぬひきあくるよそらねよるこそいとねさけれ
かろこそこそがり給そめなさうちいひたるよ

補(こよやく) (拾)物名「野をみれば春めきよけり青つゞらこよやくまゝ若菜つむ
べく

こまゝ(山家)下「あま人のいみどくりへるひしきものいこまゝとまぐりかうなま
さゞみ

こなり郡(詞花)雜下顯輔近江の守に侍りける時となき郡にまぐりけるよ云々

こほりをかづく(新後拾)戀一攝政太政大臣「あられど氷をかづくよほざりの底よくど
くるこゝろありとそ

こほりをたゞく(新拾)雜上經繼「冬夜の月々夕さむき谷の戸に氷をさゞく山おろし
のりせ

こほりのつりさ(拾)雜下云々こほりのつりさかいらしきおきかの侍りけるをめ
いらんがへんと侍りける時

おりのくさび(狹)三ノ上初よるのはどよいとどちのさねてける氷のくさびの足も
いとくさへがたくてあめともやられ給も(夫)二有家(六百番哥合)十七「山川に

氷のくさびうちとけて岩よくたくる水のちら浪玉夫

こほりのまくら(万代)春上匡房「水鳥のうさねの床の春風は氷のまくらとけやいぬ
らん

こほりのせき(好忠集)「よほとりの氷の關おとぢられて玉藻のやどをかれやい
ぬらん

こほり(壬二)中「うちとけてぬるものたゞの浦風よかまのまくらもこ
なり(新續古)冬後京極「よりの川瀧のしらなまこなりしていとねはおつるこ

ねのまつ風(夫)廿一家隆卿「ちがらきのまれの柚川こなりして影も流れぬ冬によれ月
こられるくも(風雅)冬祝子内親王「霜さむきあさけの山はうらぎりてこられる雲よも

る日かたかあ

おほれるちも(新古)冬攝政太政大臣「さゝのちはとやまもさやま打そよぎこほれるい
もをふくあらしりあ

ゆふこなり(夫)十七中務卿「いりむりさゆる嵐ぞとませ川るでこは浪もゆふをほ
りせり

こなり(後拾)冬宇治よまぐりてあどろのこなれたるを見てよめる(土佐日記)家に
いるよ月ありければいとよくありさまみゆきよよりもまいていふりひかくぞこ

なりやふれさる(増基遠江の路の記)橋のこなれたるを「中たえてわさしもてぬ
物故よ何よままかのそと見せけん(長嘯子九州道の記)爰の前かる辻堂のこなり

かゝりさる板どきの上よ夜ふくるまでさちて(和泉式部集)上「猶やめよふみりへ

さるゝをむさゞのいたゞの橋のこぞれもぞさる補（うつ布 櫻の上）十中の志やうと
もこぞれたり（宇治拾）八、大風大雨ふりて京中の家とかこぞれやぶれけるよ（大
和物）四、とゝころわたらひかどもいととろくありて家もこぞれつらふ人あどもと
くある所よいきつまつゝ（同）二又とゝこ雨ふりける夜ちりぬをまちけり雨よやさ
むりけんこざりけりこぞれたる家よていさくもりけり文雨のいたくふりしうバえ
まゐらぬかりよき云々

○こぞつち源東屋五十 こぞちしちんでんこさといとそれトしうつくりか
しり同蓬生廿昔物語よさふこぞちさりける人もありけるを榮木綿四手七志
んでんの寺よかさせ給ふべけれ御いとの布とせきをこぞさせ給ふべしとぞお
ぞしめしける源やとり木六十昔の人のゆゑある御をまひよちめつくり給ひん
所を引こぞさん同紅葉賀十ひゝおほしをゑてそゝれる給へり云々かやらふと
ていぬきがこれをこぞち侍よければつくろひ侍るぞとていとゞいどおぞいたり
（万）八ノ「秋田りるかりほもいまごこぞたねバ更科日記十とゝころあそびなれ
つる所をこぞちちらして宇治拾十三中の檜垣をさゞこぞちよこぞちて榮
れ待星）十清涼殿こぞたれてあさらくつくるべしとてこぞつが藤つぞより見ゆる

もいとあそれにて「うをさき玉のうてあとみしものを涙とゝもよこぞれぬるり
あ（万）十一いさゞの橋の壊者コボラレキ（落窪）一あれおしこぞちてんとそらちちてのゝれ
バ（空穂としりけ）廿こぞれたる部同藏開六こぞちあけ侍らん（宇治拾）廿三いた
トきなごとのけこぞちてそこようづみて云々ちんでんもとをかこぞれうせよけり
（更級日記）この宮をすゑたてまつりてせたのそしをひとまをりこぞちて（枕）四
七此雪の山いそとくまもりてわらそべかどにふらささせこぞたせで十五日まで
さふらさせ（同）卅さらば屋うちこぞたんどいひて（源浮舟）十あーがきちこめたる
よおもてをすこしこぞちていりぬ

こぞれる（後）春上梅花をればこぞれぬ我袖よよひううつせ家づとよせん（菅
万）「あさにとり野べの霞のつゝめどもこぞれてよほふ花櫻りあ（新古）秋上「あそ
れいゝ草葉の露のこぞるらん秋風さちぬとやぎのゝ原（源と、き）十志のぶれ
どかゝごこぞれをめぬれば

○こぞし（夫）九「それバまささもかぞりかく晴よけりこぞしけつる夕立の空
（源空蟬）初涙をさへこぞしてふたり（同胡蝶）廿かくさまのうきことあらまゝ
やとかかきよつゝむとそれどこぞれいでつゝ（宇治拾）一酒もさかがらうちこ

ぞして

○こぞは(伊勢物)八十雪こぞはぐとふりてひねもはよやまき(夫)十四「露なぐらこぞさでをらん月り夕まこもぎり枝の松むしのこゑ」

こぞれ(枕)五、木丁どものぞころびゆひつゝこぞれ出さり注袖くちあとなるべし

(同)六、おり物のから衣どもこぞれ出て(新撰)秋上「玉にぬく露のこぞれてむさし野の草ふきむさぶ秋の初風(狭)九下とす所々おしそりて人々あまたけそひしてこぞれ出さり(源 初音)七いづれもくおとらぬ袖ぐちぞもこぞれ出さるこちたさ(孟)

簾の所々は兩方へ袖口をいざは物あり

○のりこぞれ(枕)十五心ゆく物、もの見のりへさま一車ニアマのりこぞれて上ノ

をのこぞもいと多く牛よくやるもの、車もいらせたる(源 紅葉賀)十御ぐりのいと

めでたくこぞれかゝりたるをかきかぞ(補)宇治拾十一、車よのりこぞれてやりよ

せて見れば

こぞく(榮 御着裳)三此たつばみといふ物の例のよもよぬこちしてこぞくいと

ぞならいにくめる(うつ布 國讓)下六御けふそくよさふれかゝりてこぞをつきつ

御屏風御几丁もこぞくいとふれぬ(蜻蛉日記)中。鶴カヒいさゝりまどろめば舟

をたをこぞくいと打たくおとよこれをもおどろりはらんやうよをさんるあけ

てこれさよるのあゆいとおほりり(同)同これりれさびぎて日頃とぞれがそかり

つる所々をさへこぞくいとつくるぞ見るまいとかさもら痛くおもひくらはよ(同)

中、そらくらきまつ風音たかくて神をこぞくある云雨もやいさくふり出とおもへ

バ神のなりつる音よなんいでまうできつるといふをきくよも(同)上、まひるより

こぞくいとさくいとれるぞひとりゑとせられてあるほよ(源 夕々)十こぞで

ぞとかるかよよりもおどろく(同 紅葉賀)七屏風のもとよよりてこぞくいと

さよよせておどろく云々源朝のほ二こぞくいと引てトやう

のいといたくさびよけれを門ノ 枕十一、いみどうさむさよ夜かりをりあどよ

ぞくいとこぞめさくつをりきて

こぞめく(枕)二、またやりとあどあらくあくるもいとよくこぞめくいとたぐるやう

まであくればかりやのするあいうあくればさうトかともをめぐりてこぞめくこそ

いるけれ(同)三。名對面ハ瀧口の弓から一沓の音を、めき出るよ藏人のいと高く

ふみでぞめりて丑寅のすまのうらんよ高ひさまづきとりや云々榮うらく

もの、ふよさうして年頃さふらひつる人々云々よろづをこぞちせらひでぞめきの

のしりてもて出とこびさわぐを備(落窪)一りのへやよいきてこれあけむくいり
でくといへば云々うちをせめりてのしれさ

てへん(扶桑拾葉集)十家隆卿よこたふるふみ定家されりかゝる事のちいで候ぞ猶
おそろしき御邊りか

こと事(源あふひ)三古宮のいとやんとかくおせし時めり給ひし物をりるし
しうおしなべさるさまよもておはるがいと不し事句齋宮をも此みこたちのつら

まかんおもへば云々(同竹川)廿此御参りをさまさげさまおもふらんそしめめさ
ましき事限をかきよても只人よけりてあるまどき物(同末摘)六夕よさもある事

俄に我も人もうちとれてりたらふべき人のさとしきとこそあれかと云々(同夕
顔)卅人にいひささされ侍らんがつらきこといひてあきまどひて

こと(貫之集)五「ねさき事りへるさなら雁がねをりつ聞つぞこれのゆりま
哥ニ云メ(伊勢物)四十二ひめんせで月日のへまけることわれやいさまひけん

(源夕顔)卅うちをてまどそし給ふがしみときことこゑもせしま泣給ふ事限
か(源若紫)十御おくりよもえまあり侍るまどきことかりくよもおもひ給へら

るべきりか(同)廿あさましくおくらさせ給へることうらみきこえて(同)卅さち

よらせ給へるよみづりら聞えさせぬこと(同)四十聞えあめてすまがましきやうか
るべきこと人のほどさ物をおもひちり女のころかむしけることとおしむりら

れぬべくいののつねかり(同)はさき六むるびたることども出くるささめれせ
(同帚木)六受領といひて人の國の事よりづらひいとあきて(同)ととめ廿人し物

おもむせ給ひつべき分心ぐるしきことかうも聞えすとおもへど(同)廿せせの
う死ことをべてつれあき人よいらで心もち聞えすと(伊勢物)十六いさへりか

る事もえせでつりたれことよきで(古)講一あし引の山田此を不づおのれさへん
れど不しといふうれのよき事(玉葉)四歡喜園前攝政りくれ侍りまける秋近衛關白

の事は打續き又りゝる事の哀さへかと申とて備(伊勢物)六十かゝる君よつめま
つらですくせつとなくかかき事此男よぞされてとてかんなはなる(後)源

朝臣「あふみてふりさしるべもえてしがなむるめなきてと行てうらみん備心
こと言(伊勢物)六十心りしこくやあらざりけんをりか大の言よつきて人のくは

かりける人よつりおれける不と(拾)賀「おいぬれば同すこととせせられしを
みへちよませ君の千代ませ(源玉葛)四きこえんこともかくむづかすければ(同竹

川)二十いさしよをといひしさまのことよのさのあらせとるさるすはかりし後

どきこゆれば(同 橋姫)廿うれいきついでをめるをことかのこい給ひぞりもせの給
へ(同)

こと(異 續紀)十五 異奇 久麗白 伎形 平奈 見喜流(齋宮女御集)六「をのりまのいさし思

たでこしこともおもふことこそことよありぬれ(小大君集)廿「むをぶてたことよ

かるとも花すゝ死どくるまでごよせれさらま(源 桐壺)四此をこりまれ給ひて

のちのいと心ことよおもゆしおきてければ

こと(源 手習)六十 閨のつま近き紅梅の云々こと花よりも是は心よせのある

のありざりしよゆひのちみよけるにや

こと(異 腹又拾)物名 鼠の琴のむら子うみたるを「とをへて君とのみ

こそねせとつれことむらよやの子をばうむべき

こと(異 兄)源夢の浮橋 九ことむらりらともよりなりちもきよなる

をよび出給ひて

こと(異 法)源手習 十六 法華經のさらかりこと法文をよゆいとおほくよみ給

ふ

こと(源 若紫)四こととどころよよせゆりびりある所よ侍る

こと(初秋)下六くよときこととどのこともうつし侍らぬものあるを云

こと(大和物)五、ミツカ男 わがらくありきするをねたまでこととさするよや

あらんさるごさせせばうらむる事もありかなごころのうちにおもひけり

こと(別所 榮衣の珠)三 いどうつくしうおそいとありがゆよきこえかしてこ

どりたよゐて奉りぬ(源 末つむ)七 やがて大殿よもよらせ二條院よもあらで云々さ

はがよかうことりたよ入り給ひぬれば心もえせ思ひけるよどよ

こと(源 帚木)十ことと中よかのめあるまどき人の云々

こと(對 空穂 藏開)中ノ ちんでんひんがいのたいりけて宮すま給ことたい

どもよせ

こと(異 司 空穂 國讓)中七 あやしとおがは宰相よの御心と頭中將な給つ

ことつりさとともえをりぬ

こと(源 夕のほ)五十 廿よ日いとおもくわづらひ給へれどことあるなごりの

こらせおこたりさまよえ給ふ

こと(異 夏 貫之集)下二 (風) (袋) 「こと夏いゝ鳴けん郭公此くれをり

あやしきのかしことよひをりりあらとどぞさく(袋)

○ことおほせせと 異仰(うつろ)初秋(下)五 かりさうをことおほせせと、身をい
たづらよあさん 云々

○ことおんり (拾)戀四 天曆御時承香殿のまへをわらせ給ひてこと御方にとら
せ給ひてれば 齋宮女御

○ことふえ 異笛(枕)二 ことふえふたつしてさりさをおりりへーふりせ給へば

○ことき 異木(枕)三 またこと木どもとひといういふべきはあらせ 中御

○こときとどり 主ドリ(落窪)五 何のよりにりこと君せりのを奉らんとかけ

○こととやさち 異宮達

○ことみやうぶ 異命婦(うつろ)藏開(上)五 ことをみやうぶさちいづこよりある

○こともの (源す、む)十 冷泉(下)五 ねびと、のひ給へる御りたちいよく、こと物

からせ

○こと 琴 ○琴の下樋 (袖中抄) 琴とればなけささ死どつけたしくもことのおたひ

いもやりくせる シタヒと下樋と、く琴腹の中、樋は似たれば下樋

とよめる ケソレニイモガカクシタルカト云へルカ

と 毎(古)八 春下(よみ) 人いらす 「鶯のかく野べことよきてみればうつろふ花は風ぞふれける

(伊勢物)五 「人いぬわが、よひぢのせきもりのよひく、ことようちもねか、ん

(源 帚木)三 十志のおきどかえたとおれをぬねれば折く、ことよえねんトえせ(万)五

「人ことよをりかさ、つゝあをべせもいやめづら、き梅の花も 彌廣足云ふるく

の云々ことよと必しもトをそへたるに堀川百首、やどもせよあさこと稻をほすより

いむてをゆひてぞかくべかりけるといふもあり

と (古)人 春下(よみ) 「花のことよのつねからををてしむり、いまさもりへを

さなま、(同) 戀三 小町 「夢ちよのあ、もやすめせりよへせもうつゝ、よひとめみ、こと

のあらせ(貫之集)八 「夢のこと成、よ君をゆめよごよ今、みるごよか、さくも有り

か(源 東屋)三 おあトととおもせせてもありぬべきを(同)九 手よさ、夕たることお

もひあつりひろ、ろみ奉るよ(同)おせのこと奉らん、のやせ死事あれど(万)七

卅長哥云々おもふどあかく、あるをむいまもえること(伊勢物)廿四 「あづさゆとま

弓つきゆみと、をへて我せ、りをとうるこ、みせよ(万)九 望月のとてるおも

とよ花のことでゑてたてれば夏虫の火は入が、こととあど入、舟こぐことくよりか

くれ(拾) 戀二 忠見 「夢のことかどりよる、も君を見んくる、まつまもさどめあき世よ

(同) 夏 忠見 「あがることまこものおふるよど野よ、露のやどりを人ぞかりける(後)

雜二 嗟峨后 「うつろそぬ心れふうくありければこゝらちる花春よあへるごと（同）戀三、讀人不知

「あたひものしるしとするもとけなくまかたるごと（古）上秋

はみ人 「秋萩のいろづきぬればきりたしはしがねぬこと（万）廿

十 「かすまたつ春れを止めをけふのこととんとおもへばたぬいどぞ思ふ（同）十四

「さぬちくの玉のをさりりこふらくいふとのさうねのある澤のこと（躬恒集）

どむれとどむめりねつも大井川をせれをこえて行水のこと（古）戀三、よみ「あふこ

との玉のをさりり名れさつのはよし野の川のたぎつ瀬のこと（賴政集）

ろをばをせよせられけりやかせよとまる紅葉のこと（万代）雜五「有爲の世のいづ

ら常ある草の葉よむすべる露此風まつがごと（貫之集）

河のをまたのこどもおつる瀧りな（後拾）雜一、齋「夢のことおぞめりきゆく世の中

よいつととんとりおとづれもせぬ（万代）戀二「ともすればあたるうさよふちを

みのなびくてふごと我をびけとや（源わかし）六廿おもひのこときりえ給ひてこそ

いさめんよりなまそ用るさらん物々らわれさういこといせんもあいかいとおぞ

補 こといで、（大鏡） 東宮にさふらひー給ひーやども宰相のかよひまゐり給ふこ

とあまりこといで、こそい宮もきこーめして

ことい、（源わらな）下 さまとーよものかなしきどかつのゆーいことい、

（同 初音） 四 夕よあそれとおぞーあることいともえー給をぬけーきかり（同 紅葉賀）

十 けふのことい、い給ひそとて（同 藤はのま） 十月たゞの猶まゐり給せん

ことい、あるべー（蜻蛉日記） 中、かくをりかゝがらとーたちりへるあーたにのあり

よけり年頃あやーく世の人のすることい、かどもせぬ所をれをやかうのあらん（源 蜻蛉） 十。

どふかくするものなりければいどあやーうまいのさほうなどあることい、給をせ

ろくーとあぞれぬるをけふのことい、みすべき日とおのこひりくー給ひて

見給へとておれてかくことい、文詞 云々

○ことよて（源 権ウ本） 八 ことよおどろくーくいのあらせそこをりとかくくるー

うかんまこーもよろーうからばとねんトてなご詞よて聞え給ふ（同 恋合） 十 御せう

そこのたゞことさよて(蜻蛉日記)下云々としてやりたるをものへなんとてりへりて
とかい又の日歸りよたりやかへりこと、詞よてこひよやりたれば(源わかあ)上、四
御カヘリ 御めのとさ聞えさせ侍りぬとばかり詞よ聞えたり(大和物)五ぬよよせ
うそこ聞えバ申てんや文の世よと給ハド只詞よて申せよといひければ(源蜻蛉)卅
文云々 こまりよりき給ひて云々など詞よもの給へり

○おとををつくは 源竹川廿いととき詞をつくして文詞云々

○補 おとをさみ 源橋姫十けむひいやくおとをたみて

○補 ことささむりひ 著聞十二海賊一人もの、ぐして出むりひてことささむり
ひをいけり云々 詞さむりひして

○ことさなど 源はたる三さるべきをりくの御りへりかどか、せ給へばめい
で、詞かどの給ひてか、せ給ふ

○ことさのそや 詞の(千載)序心の泉いよへよりもふりく詞のそやいむりよ
りもあけい(扶桑拾葉)廿。花鳥余情 ちりのあれど筆の海よすなどりてあみをもれ
さる魚をいり詞のそやいよまぶい、てくひせを守る兎よあへり(新續古)序 ちりの
あれど心の泉くめばいよ、こき詞のそやいさればまはく、いけい

○ことさのその

○ことさのうみ

○ことさのやう 源總角八十哥云々と詞のやうよ聞え給ふ

○ことさおほりる 源若紫廿 詞おほりる人よてつきく、ういひつぐくれど(同
東や)七。媒ノ さらあしく詞おほりるものよて申すよ(同)廿 詞おほりる御本性をれ
ばあよやりやどの給ふよ

○ことさませ 詞交(源帚木)十君のうちねふりてことさませ給をぬをさうと、く
心やまよとおもふ

○ことさむくな (枕)十二、よろしく物せさせ給ふなるをかん悦ひ申侍ると詞をく
なよて出る

ことひ (古)離別よみ「か死くらしことひふらん春雨よぬれぎぬきせて死ををと
とめん (和泉式部集)上松にふちりりたる所人々おやくよりてみる「ことひふ
ちちらでちとせをさぐさなんまつのときひよ來つ、見るべく(同)まゆみの木のお
いたると見せ給ひてことひふりくもかりよけるりあとのさまをそれバ「ちら露の
そりなくおくとと、よよ

こととへ(うつは 國讓)中七此宮よさふらふ人のとぐるしくめづらしけなき事よのくさべればも下めものし給ふごまことをへもかりんめるよとぐるしけれとこよさへはもむなち侍らんやのとてかん

ことよ 事よ(空穂 菊の宴)下廿大殿のりたよよもまうのやり給ふ事もかくてさぐあきをのみぞ事よいせらるめる

ことよて(蜻蛉日記)中下あくればおさくるればふすごことよてあるぞいとあやしく覺ゆれど(濱松)四三せめておもひあまりぬるをりのもろともよ打ふしおきもよと

六宮のそのころまりで給ひぬれば例のひまもやとうりやひありき給ふを事よて

ことよ 殊(後)戀二「よれつねのねをしなりねばあふことの涙のいろもことよぞ有ける(源 桐つは)廿三 いよくみちくのさえをあらもせよまふさのこことよけく

て云々(古)秋上「山ざと秋こそことよびしけれ鹿のかくねよめをさまいつ(同)物名琴「波の音のけさうらことよきこゆるのむるれしらべやあらたまるらむ

(後)春下「ちらくもととえつるものをさくら花けふのちるとや色ことよなる(同)貫之「おが身にもあらぬわが身のかあしきの心もことよなりやにけん(道濟集)

「不とぎにまづこゑきけは山ざと常よりことよ人をまざる(源 朝顔)四かがくど聞えたまへばことよかくさむりひて人の不めぬとぞ哉とをりくおぞは

(同)上ノ人よりことよりぞへどりたまひけるけふの子日こそ猶うたてけれ(同)四十宮の御りたよ文奉れ給ふことよまづりしげもあき御さまかれと御ふでか

どひきつくるひて(枕)一男ぎみもよくからせあいきやうづきてゑとることよおどろりせ顔をこしありみてゑるもをり(源 紅葉賀)三けふのしがく青海波よ

ことよかつきぬいかゞと給ひつると聞え給へばあいかう御いらへきこえよくてことよまををつとむり聞え給ふ云々舞のさまでづりひかんいへのこのことある

(同)卅筋りむり今めりしうのあらねど人よのおとよかよせよまへり(文徳實錄)九

六ノ有 殊障天 二一日之間延怠留事 乎奈 恐畏 御坐 須 止 十六 有 二 毛 六

ことよいので(源 蜻蛉)廿いつくとのみことよいのでいの給ひねど

あとよつけ(古)序春の花のあし秋の月の夜とよさふらふ人々をめて事よつとつ、哥を奉らしめ給ふ

ことよむをびて(後)離別「忘れとことよむをびてとるるれば逢えん返り思ひまどるあ

【補】ことよおきて(著聞)十二 朝夕めつりふ事よおきてかひとく大切の事
よもおくりけれバ 廿五

よとよふれて(源 桐つは)五 こあたりをさ心をあせせてもしたかめづらさせ給ふ
ときも多かり事よふれてりせしらせくるしきあとのとまされ(同 榊)七かさく

おぞつめさる事どものむくひせんとおぞをべりめり事よふれてもしたかき事の
と出くれ(同 紅葉賀)十かくをさなき御けそひの事よふれてしるけきは(同 湊標)

廿こゝろぞをくてもまり給をんを必事よふれてりせまへ聞え給へ(同 帯木)廿さら
バ此人こそいと事よふれておもへるさまもらうたけかりき(同 榊)廿大后の御こゝ

ろもいとわづらひくして出入給ふももしたかく事よふれてくるしけれバ
【ことよあたりて(古)下 雑田村の御時事にあたりてつものくよの須磨といふまこもり
侍りなるよ云々行平

【ことよあらせ(源 みをつくし)十 ことよあらせしてをさく聞え給ひぬを
【ことよあらせ(源 しのあ)上五 女三、むづりうこそいあらめ何事をり聞えん
【ことよあらせ(源 しのあ)上九 返事

とおいらりよの給ふ源詞人のいらへん事よしたかひてこそいおぞいいでめ
【ことよもあるま(源 しのあ)上六 身よとりてのことよもあるまどく思給へさち侍

るをりくあるをさらにいとのひがたき事おほりぬべきまこを侍りぬれ
【ことよあらせ(枕)七 うれしきもの、いりあらんと夢をまておそろいとむねつお

るよことよあらせあいせなせしたるいとうれし(源 桐つは)十 ことよもあるま
おぞいけちてもてか給ふあるべ(補)宇治拾三 事よもあるまとのへはどおぞ
ひまふせて

【ことよ(家持集)廿 一あき風のこことよふきぬいろたへのわがとき衣ぬふ人のあ
【濱松(四)廿六 何こゝろかきけしきもいとらうたけれつとめてもあと、日高うある

まで御とのでもりすてしたるに(蜻蛉日記)下 雨ふりいでぬいとわりかとおもひ
つ、法師の坊にいさりていかすすべきあといふふとよことよあけてよ、そのや笠

やど人のささぐ(源 桐つは)三 ちりとりしきまうしろをかければことよある時には
猶よりどころかく心をとばかり文丸案トリタテ、事アル時ニハ也 (同 野分)六

そを給へりつるをひきよせ給へるよ云々さすがいとかでやりあるさまよてよ
りかゝり給へるのことよなれくしきまこをあめれ

【ことよ(殊トノ心カ)源 帯木)四十 ことよあゆくかればさうと口までおくり給ふ。宣長
【ことよ(トリワケテ)源 帯木)三 ことよあゆくかればさうと口までおくり給ふ。宣長

云事トハ何事ニモアレ其事ナトリタテ、ユト、スル心ニテ事トアカクナルハトリ

タテ、アカクナルヲナリ河海ニ事ト也トアルヨロシ、ワザトガマシキ也トアルハタ
ガヘリ細ニコトトシトアルハカナハズ補(万代)雜一「ミヤまよひのりさを
れもやけれどふもとの花のあと、さくめり(空穂 樓の上)上廿七 大將まゐり給ふめり
やかと聞え給ひてこと、さしをち給ふ(源 野分)六いとをやりあるさましてよ
りちり給へるのこと、かれくしきよこそあめれ

こと、いへば(源 夕霧)六十 山鳥のおちぞ給ひけるからうとて明がよかりぬ
うくてのみ事といへをひたおもてあるべければ出給ふとて(同 雜か本)廿心より外
よそらの光りと侍らんもつ、まううてまゝ近うもえみとろぎ侍らぬと聞え給へま
ばあと、いへばかぎりなき御心のふりさまかん月日の々々の御心もてそれとて
くもて出させ給ひてこそつみも侍らめ行りたもかくいおせう覺え侍り(著聞)「こ
と、いへばありかからもえてうがかねいしねさもひきこゝろとん(落くほ)二
中納言どの、人々をらごちて、事といへば大將殿をらのやうよ云々

補あと、かく(山家)下「こと、かく君こひわたるまゝの上はあらそふもの、月の
影のみ(同)同「こと、かくけふ暮ぬめりあはもまたかをらせこそひまはぐるかけ
こと、やのせー(うつ布 樓の上)上ノ「ひきあて、みねごよこけし心はもえちの
十四

せきぞこと、やのせー

こと、ふ(古)羈旅業平「名よおのいざおと、そん都鳥わがおもふ人のありやあ
やと(新後拾)秋上、後嵯 峨院御製 「ありつきの枕のいたよすみかれてねざめこと、ふきりぎ
りはるか(拾)別倚平「むり見いきのまつばらこと、いざわすれぬ人もありとこ
さへよ補(万)廿七けふたよもこと、ひせんとをみつ、かかみいませ(同)十八
秋よあらねばこと、ひのともいさくら

○おと、そぞ不言(日本書紀)不言問(拾玉)五定家「こと、そぞちぎり道もたえよ
けりさくらの雪にふりあをるまで

○こと、いへば(源 ありし)十一らぬ世界よめづらさうれへのかぎりみつれど
都のうさよりとてこと、いへばこける人もあ

こと、いへば(空穂 ありて宮)二 源宰相も死ぬべしとをいふあること、の事としてか
くかんあるあやうくささかかりぬべき年とて

こと、いへば(源 手習)七十。僧都 山よりおり侍ることむりい事ともおも
ひ給へられざりしを

こと、いへば(竹取)上人の物ともせぬところよまをひありけども何のなるいある

べくもみえぬいへの人ともよものそなよいむんとていひらくれどもことよもせせ

備(著聞)十六 わが氏をバ存せざりけるといひてことよもせざりければ

ことよもり(枕)七 すすことよもりをるひとのいみどうつくるひめをたうとき

りせんとおもひければえもいひつゞけせ(源とて夏)廿をうことよもりとぞ大ぞう

そしりさるつとよもりぞへためるりうとの給ひて

ことぢ 琴柱(千載)別 蒼海波の秘曲のことぢさつることをうへ侍りてそのよの譜

りきて給ふとて

ことりづりひ(江次第)九 先二三月頃大將以下於陣座定相撲使事關白大將隨身陣

官人賭弓矢數者等爲使遣諸國七道召相撲人也(年中行司哥合)「うたさきてことり

づりひのいそぎうけふのぬきてのさめとかりけり

ことわり 其管モ(源 帚木)七 打あひてをくれたらんもことわり(同 桐つは)五ひまを

き御まへわたりし人の御こゝろをつくり給ふもたよことわりとみえたり(同 帚木)

卅うちつけよふかゝらぬ心のはとよ給ふらんことりかれと(同)四十よし今の

とよとかりけそとて思へるさまはよいとことわりあり(同 明石)四されとたゞわり

れんやどのわりあさをおもひむせびさるもいとことわりあり(枕)八 又いちちるか

らぬ人のこゑきつれたるのことわり(源 夕かほ)卅あきまどひ煙よさぐひてあさ

ひまありあんといふことわりかれとさあん世中のある(同 やとり木)十かゝるふる

人かどのさふらせんよことわりあるやをみ所の(同 はさき)五 中將のこのことわ

りきゝむてんと心よいてあへらひの給へり(同)七のり師のよのことわりと

さきりせん所のこゝちするも(同 やとり木)卅むたよ世のことわりををり給えぬこ

そらうさきものからわりなけれ(同 夕霧)六 いりて人にもあどわらせん云々ことり

りのたよいづりたよりのよる人侍らんとせらんと(重之集)九 波の聲よ夢驚りせと

いふ題をためきよとむねちりとよよませて親のことわる(蜻蛉日記)上、あへの哥

云々まけド心よて又哥 云々これのさもいふべいとや人ことわりけん(源 うきふね)

五 卅帝の御聲よてありぬことかゝとぞ世の人もことりける(同 はさき)六 とりと

りよことりて(同 螢)廿つらうとおもひをりういりて人よもことりせ奉ら

んとおもひおきしことわかれがたくて人どの内府とさすいひわけと(六帖)四(万)

四ノ 天地の神もことわりあくばこそ我おもふきみとあひせめ(舒明紀)天

卅二 神地祇其證 云々トアルナことわり給へトヨミテ祈ルシルシナクバトイフカ(源

あらし)五 づめる輩とこそうりべ給ひうとあよのむくいよりあらよこさまか

る波風よのおぼれ給はん天地ことわり給へ(源 柏木) 廿。死後七。柏木これこそさきた、
めよのことわりなうつらいこと、こがれ給へど何のうひかへ(同 東や) 四十繪をど
とり出させて右近よことわりよませて給ふ(万) 十五よの中此つねの己等利
利かくさまよかり來よけらよをえよさねから(金葉) 戀下よみ人しらす「ことわりやおもひ
くらぶの山櫻よひまされる花をめつるも(續拾) 雑中「おもふほど心を人よあら
きねばうよといふよもことわりかへ(同) 同「たづぬれのことわりかへよ
かくよ人のあけきを我うれへつ、
補 ことわりかく(長秋詠藻) 上「うき身ゆゑなよりの秋のとまるべきことわりあく
もをよみける哉(月詣) 九法印「うき世をばわが身もこそいあきまつれことわりな
くもをよきけふりか(堀川院艶書合) 一うきながら人をつらよとちりぬればことわ
りかくも落るかよどり(同) 一かりその絶えをさへや恨むべきことわりかきハ涙
かりけり

ことわりいらぬ(源 やとり木) 四十哥云々御いらきの心うきのことわりいらぬつら
さのみかん(狭) 四上文の哥云々ことわりいらぬをなぐさめわびてなん(同) 三身
より外よつらき人をくつて例のもろきかよどのよどことわりいらぬものなりたる
かりけり

ことわりもきまえ(源 未摘) 十五みづからことわりもきこえおらせんどのたまひこと
るあり
ことわりもいらぬ(狭) 四下「おどわりもいらぬ涙やいりからんわれより外の人を
おもそよ

おどわりもまぎて(狭) 一上女二のみやの御かたちこゝろさせことわりも過ておそ
よまを(同) 廿下「まいて目にちかく御らんとあつひ聞えさせ給ふ堀川の院の御
いらきことわりも過てかぎりかき女御の御さいとひとみえたり

ことわる(枕) 四十五 あり 判断する あり お前よ人々おやくつとひめて物語のよきあしきよくき
所おとぞさごめいひいろひせうト仲忠が事などお前よもおとりまさりたる事か
と仰せられけるまづ是のいりよとことわれ仲忠がむらのおひのあやしさをせちよ
仰せらるゝをなどいへば(宇治拾) 六帝王これをことわり給へと申よ
ことわざ(源 夕きり) 二ことわざよ夕きおのがトのいとかみにまぎれつ、(同 帚

木) 八

むらなくし出さることわざも故なりらせとえたらん 云々(古) 序よの中よある
人ことわざよけきものかれバ(源 朝顔) 廿いふりひありておもふさまよそりかきこ
とわざをよかき給ひいら(續紀) 廿三見可答事(奈世) 紫日記) 下廿かのものい

ひの内侍へえ聞きさるべし知りさらばいりてそを侍らんとて世の中
とささけくうきもの侍りけり 此ことわざの諺ノ意はココヨ可考

ことぐましく (源 夕きり) 六十さがかく 也 事ぐましくも志さくのをまむつりう

ことよりて (源 若菜) 上ノ紫上ひと方あめればそれよことよりてりひななあるを

まひ給ふりさく こをいおなりめるを (同) 上ノむりしもうやうなるえらびよ

何事も人よことある覺えあるよことよりてこそありけれ 十七

○ことよせて (源 少女) 十母后のおひりまさぬ御りそりのうしろとよことよせて

よつくりあるべくととり よおなりあらそひたれと (補) (新續古) 戀一 通 一 まひのま

草葉のつゆよことよせつひるの袂をいかゞのまん 補 (新續古) 戀一 通 一 まひのま

○ことよさん (古事記) 上言依 汝不治所事依之國

ことよく (源 東や) 十媒のかくことよくいみつきま女にましてすりされさるよやあ

らん (同 総角) 六 例のさろびさる女房かとりりる事よのよくささりらもいひま

せてことよがりかともずめるを (抄) 巧言令色也 (源 蓬生) 十 ひさぶるよ人さろけよ

ひよももてあしきこえとかといことよくいへ (古) 戀四よみ 一 いでひとのこと

のみをよき月草のうつし心いことよして (源 蓬生) 九 あそれようしめたくか

んかどことよぐるを更ようけひき給ね (同 やとり木) 廿 九 かゝる方よもことよき

心つきかくおせ給へ (宇治拾) 廿四 いそんに隨て唐よもせられていらんか

とあとよくいひければ とあとよくいひければ

あとたをりり (うつは 藤原の君) 四 長雨のふればことたをりりもえせでさらくつを

ぞもてさづらふ ぞもてさづらふ

補 ことたのく 言高 (枕) 五 かをりりののをべらざりつと言たりくいへば

ことたがふ (源 浮舟) 五 ことたがひつゝあやとおもへてこゝよてささめいそん

もことやうなるべければ (同) 五 ちりつとひをべりつればことたがひつゝそら

ここのやうに申さべりつるを ここのやうに申さべりつるを

ことどつ (四季物語) 行りひ志けき都のさらよて人めまれある山里も事どつこと

してあるの薪やうのものによねの袋をそへあるのちひさき器は御酒をもちろさ

布よべよといふものさしてかづきつきさるるのめもあけまきもうおすかの神主

つかうまつ (伊勢物) 三 八 十月 つかうまつればことどつとておそみさまひけり ○契沖

云ことどつ このをよめなればといふそこのころあるべし (補) (續紀) 詔詞 辭立

ことたらせ(源 帚木)六 おおやえ衰へぬれば心の心として事さらせころびたる事ども
出くるべきかめれば

ことごま(玉葉)賀延喜 御製 「いそひつることごまからば百年の後もつきせぬ月をこそ
とめ(保憲女集)万代てられば日本の本國ことたまをさもつよりかへり(万)十三「志

きよまのやまとの國のことごまのさくるくにぞまさきくありこそ(同)五長や
まとの國のさへ神のいつくしき國ことごまのさきふ國とりたりつぎいひつぐひ

けり云々(同)十三 事靈八十衢ヨシノノササキよふけとふ占まさよのれいもよあさんよ(續日
本後紀)日本のやまとの國の言玉のさきまふ國とぞ(散木)除「ことごまのおほつ

りかさよをがみまど梢ががらも年をこすりか
補ことごえて 言絶(万)四五「いける世よわれのいまたまごことたえておくおもー
ろくぬへるふくろの

ことごゆる(蜻蛉日記)上「ことごゆるうつゝや何ぞかりくよ夢のうよひちあり
といふものをまたことごゆるの何事ぞあなまぐくよとて歌云々

○あともたえせ(大和物)一子どもなどありれば言もたえせ同一ところよなんす
と給うける

ことごとも(拾)七 物名 「ことごともきよたよわりせむりかくも人のいかるうよや
よあま(續後拾)戀一 花山院 「ことごともいそれぬまでよくるよきこれやこひせる
ためよあるらん

ことごともあき(新勅)戀四(中務集)「身の上も人の心もあらぬまのことごともあ
くねをのぞかきしあへ「君ごよもことごともあき涙をばいりよりてかあれと

おもさん(元輔集)「紅葉あるところかりり山里よことごともあき袖のぬるゝの
(後)八秋中よみ「人のいさことごともあきかめよぞわれのつゆけき秋もいらるゝ

(古)戀三小町「秋の夜も名のとまりけりあふといへばことごともあきあけぬるものを
(源紅葉賀)八「さくもさふらふべけれどことごともあきべらぬほとのおのづら

おこさり侍るを(後)戀一八しらす「とるときのことごともあきぬ時のことありがや
よ戀よきやあき(風雅)重保 上「ゆふまぐれすぐるかく野の風のおとよことごとも

なく物ぞりあき(拾玉)五「こよひまたかそがのさとよやどから昔よのおやこ
とごともあき(新古)秋上後徳大「夕さればをぎの葉むねをふく風よことごともあ

くなまごおちけり(長方集)「秋たちてことごともあきかかきよ萩の葉をよぐゆ
ふぐれのそら(散木)「ころもうつきぬたの音よゆめさめてことごともあきぬるゝ

ことごともあき(新勅)戀四(中務集)「身の上も人の心もあらぬまのことごともあ
くねをのぞかきしあへ「君ごよもことごともあき涙をばいりよりてかあれと

おもさん(元輔集)「紅葉あるところかりり山里よことごともあき袖のぬるゝの
(後)八秋中よみ「人のいさことごともあきかめよぞわれのつゆけき秋もいらるゝ

(古)戀三小町「秋の夜も名のとまりけりあふといへばことごともあきあけぬるものを
(源紅葉賀)八「さくもさふらふべけれどことごともあきべらぬほとのおのづら

袖うか(拾員)上「春秋やことぞともかきすぎまよてさもいたづらよつゝる」とり

な(同)同「もどめても秋より外のやともがふことぞともかく袖やうとくと(續後

拾)戀一花山院「ことぞともいされぬまよくするさきこれやこひをるさめいあるらん

(風雅)雜上「つくつく」とことぞともなきかめしてこよひの月もかふふきまけり

(新續古)雜上後嵯峨院中納言「秋のよせことぞともかく明ぬといたなをさづめやおもひ

るらん(方代)戀四俊忠「忍されんことぞともかきまづぐきのさびし袖よをそのつく

りあ(新古)戀五家隆「あふとてことぞともかくあけにけりそりかのゆめのわすれが

たまや(玉葉)戀四實方「ちりひてしあとぞともかくわすれをびひとのうへまであたく

べきかか

ことつゞけ(狹)上中云々「とからうとてことつゞけてのたまのさるも云々

ことつくる(源)蜻蛉四「ことつくる事あぐて時方をりたらんを物の聞え侍らばお

せしあむをる事をせや侍らん(中務集)冊「ことつくる君々つらさの神よりも絶を

を我ぞわさしわづらふ(補)後拾)雜二上「これもさしあしりけりかつのくよのお

やことつくるをすめあるらん

補事つくべき(宇治拾)九「何事よつけてりこれをゆるさんとおもふ事つくべき

ことか

ことづけて(土佐日記)正月十日のあしりけよことづけてはやのつまのいせしを

あひびをぞあしりよもあらぬまよ。あぐて見せける(源末摘)廿六ゆるしあき御け

しきかれつらうかどことづけて「朝日さすのきのたるひのとけかからあどりつ

らゝのむせぞゝるらんと給へどたむゝとうちをらひて(同)榎柱)三かこよま

ちどりてよくしもおもふまとき人のもの給ふかるがいとほしさまおどづけ給ひ

て(同)行幸)七兵部卿宮今のことづけやり給ふべきとこほりもかきせとおりさち

聞え給へど(同)榎柱)十此御けしきもあくけよふをべうらまなど給をさかりく

ことづけて我もむらひ火つくりてあるべきを(同)帚木)冊その夜の事よことづけて

こそまわりさえしり(同)冊「いなることづけぞやといひもせてせしりいで、

まべりぬるよ(同)榎柱)廿六打たえておどづれもせむしとさかりしよことづけが不

なるど(同)あふひ)三をささき御ありさまのうしろめさまよことづけて下りやい

ましと(同)盤)廿紫上も姫君の御あつらへよことづけて物語のすてがたくおせし

り(同)葵)七俄よいとくるしけしをべるをえひきよがでなんとあるを別のことづけ

とよ給ふ物りら(同)紅梅)八麗景殿よ御ことづけ聞え給ふ詞云々(枕)十四しきへ

んまゐることづげやあるいつり参るおどの給ふ補(万代) 戀一 匡房「春くれバのまじりやまのあまを、ぎことづけてのみぬる、袖哉」

ことづて(源 帚木)四十ことづてやらんよすがどよあきをを(同 うつせみ)十かの人

もいりよ思ふらんといとぞしけれとかたよおもほしうへして御ことづてもか(後) 戀五、よみ 八しらす「いづりよよことづてやりて雁がねのあふことまれよ今なるらん

(拾) 戀五「こひよかは戀もいねとや玉ぞこの道行人よことづてもあき(新古) 夏 定家

「玉鉾のみちゆく人のことづてもたえてほどふる五月雨のころ(拾) 雜春 像見「故郷の

から一の岡よとよぎをことづてやりきいりに告きや(古) 春上 射恒「春くればかり

へるかりいら雲のみちゆきふりあことやつてま(同) 大歌 所「うひがねをねこ山

こ吹風と人よがもやことづてやらん(康資王母集)住吉神主國基が持佛堂たて

侍りよつまとをえさせむべるとてかくいひつりよさる「檣の戸を西よあけて

やあがむらんさきたつ月よことづてをして(檜垣集)「いとまどりけて飛鳥まで

や鳥尾よも羽よもことつよへせん補(後) 春中 菅原 右大臣「さくら花ぬよををれぬもの

からバ吹こん風よことづていせよ(貫之集)「かへる鴈わがことづてよ草枕さびの

家こそこひりりけれ(續古) 雜下 泰時「おもひやる心につねよりよふともいらせや君

とがあづてもなき

まどつきぬ(源 紅葉賀)三はふのうぐの青海波よ事皆つきぬ

ことつびきびう(源 常夏)九物の上手いづれの道も心やすからせのみぞあめるさ

りともつひよは聞給ひてんうとていらべすこ引給ふことつびきびういまめり

しうをり

ことねり 小舎人 (枕)二ノことねりのちいさくて髪のうるはしきがすをさのらりよ

聲をりしうてかこまりてものかといひさるぞをやうくしき(花鳥)中少將のめ

いぐせるわらのを小舎人といふあり

ことねり小舎人童 (宇治拾)二、駿河前司橘季通 云々例のことなれば小舎人童一人

ぐして局よいりぬ

ことかゝる(千載) 雜中となき國よむべりぬる時同トさまあるものども事をほりての

やるときこえける時その内よもれよけりときよて云々(著聞)ころの外ある事よ

ていらぬ國にまかりけるをことかゝりて京よのりてのち(源 若菜)上、六をれよつ

けても又やまからせいふ人々あるよくよくゆかくさへ聞えりり給へばことか

ほりてめやすくあんありける○人のいろくいひよことなほりたる也

ことある(源あふひ)七物もいそで歸らんとし給へどどほりいでんひまもあき事
なりぬといへ(詠)狭(三)けふつねよりこと事をもとくなりて出り車ともよせて
のせさせ給ふ(枕)九(九)いつしうとまつ御社のりさよりありさぬきたるものども
などつれざちてくるをいりよ事なりぬやとへばまどむことなどいらへて

補 ことなる事なく(伊勢物)百三(段)むりーことあることなくて尼よなりける人ありけ
り

補 ことならバ(源横笛)十一(四)笛竹よふきよる風のことからバ末のよあがき音よつた
へかん(月詣)二(兵衛)「ことからバ花のさくりを見てりへれこしちもおあト雁のやど

りを(紫式部集)「水うみよ友よふ千鳥ことからバやそのとをこゑとえあせそ
(後)人しらす(春上)「ことならバせりつくしてん梅花わがまつ人の來ても見なくよ(大

和物)「ことからばそれせもあらなんあきぐりのまぎれよみえぬ君とおもせん(續
後撰)春下(崇徳院)「ことからバさてこそちらめさくら花をいまぬ人もあらトとおもへバ

(顯季卿集)ふしあがらまことなきこひ「ことならはふは名もたらぬひよをらよう
ちもとらかん妹が下ひも(和泉式部續集)「ことからバあそれとましめのまへよ

涙の露ときえましものを(續古)戀四(中務)「ことから雲の月とかりかゝんこひよさ

のけやそらに見ゆると(濱松)上(四)ことからバ松風のおとをもよのつねよたづねより
てこゝろのあきさむりたもやとおもひよらましを(續千)春上(後嵯峨院)「ことからバ色

をもみせよ梅花りのかくれあきよその春風
ことからせ(源柏木)九(卅)いとゞく春雨りとそゆる迄軒の果よことからせ

ことなく(源楳柱)七(十)御修法かどとめさせ給ふ云々此頃をりざよことなくうつ
いでゝるよあらせ給へとねんト給ふ(同)わかあ(上)九(此頃)こそいとつれトよまぎ

るゝ事かりけれ公私よことかゝや何とさしてりいくらいべきかどの給ひて(同
浮舟)廿(も)つせの観音けふことかくてくらし給へと大願をぞたてける(後)夏(よ)み人

「常夏の花をたよ見バ事かゝよまぐは月日もみトりりかん(あ)すことなくていた
(源そま)三(十)ことあしよてすぐしつる年をろもくやしう

ことかゝが(枕)廿(八)たのもしけなきもの、そらとどる人のさしけよ人の事を顔
よ大事うけさる

補 ことなく(後)雜三(貫之)「かざはともたちとたちぬるうき名よのことかゝ草のり
ひやかりらん(新勅)戀五(よ)み「君をせでよどのふるやのひさしよあふことかゝ

の草ぞおひける(後)戀二(つ)まにおふることあし草をみるからし頼むこゝろぞか

まさりける○契沖云ことなり草のいのお草の異名也或人云筑前志賀町家こと軒

は神社の地の椎柴をさして災を除かどはこれのことなり草といへり

ことなりふ(古) 戀三よみ人しらす 「むら鳥の立よわが名今更ことなりふともしるいあ

らめや(六帖)下六、「五月雨とことなりひつるときもぞ人よあふちの花のささける

(後) 三 雑男のものよまりりて二とせをりありてまうできりけるをほどへて後

ことなりひよこと人よ名とつと聞いのまことなりといへりければ云々(蜻蛉日記)

上、さてもいとおやかりつるやとよことなりひさるをさすのびさるさまよこ

ちよかといひつゝあるべきを(狹) 三 中あぞやうよことなりひからんり(源夕霧)

四十いといく事をいひに歌云々(同) わけまき 一冊事をいひよあき給へるがをりう

みえければ(榮若水) 七例の拜禮あるよことなりひよてとのをらまりで給へる

(壬二) 上忘れととさてちりひを今さらにことなりふとも神もゆるは(枕) 六 宰

相中將の御いらへをいりやことなりひよいひ出んとこゝろひとつにくるべきを

(狹) 三 上「まさらぬ曉露よおきわびて八重たつきりよまよひぬるりかゝとやうよ

ことなりひあるらんり(枕) 十二 例もりくやあやみ給ふか事なりひよ問人も

あり(紫日記) こよひのさへがく身もそくみて侍ることなりひつゝこあたのぢん

のりよよりいづ(榮初花) 九 四十盃のめぐりくるを大將のおち給へど例のことなりひ

よちとせよろづよよてまぎぬ(枕) 十二 十八、すゞりとりよせまこまやうよおしすり

てことなりひよまりせてなどのあらせ心とめてかく(狹) 三 下かこよていたれり

いどこをことなりひよいひかゝ給ふ(同) われいもおもひあつりふべきよあらせ

さこそことなりひよいひかをも(同) ことのもよとまるいのちも侍るとりやつら

さのちのしるべよてつひの世のためよあいうも侍らざりけりかどことなりひ

よいひかゝ給へど(源手習) 三 四十いど心つきかくうとて見らぬこゝちてかや

ましくかんとことなりひ給ふをいひていふもいとちか

でどう 御燈(年中行事哥合) 御燈「さむねする星の光よまがふりかまねよかゝぐる

秋のともい火御燈と申天子の北辰よともい火奉り給ふことなり今其義たえて

かゝ北山の靈巖寺といふ所よて高き峯に火をともして北辰よ供せられける也

ことうるましく(源寄生) 八 九いことうるましくあるあまりよどりこめられ

て(宇治拾) 五 十二めいよとされてことうるましく扇を笏よとりてうづくまりるたり

ことうけ(宇治拾) 五 六家綱事よあらせてのきむとやさんとことうけい(著聞)

九いふまゝよことうけいぬ

ことのも(古) 戀四よみ 人しらす「おもふてふ言の葉のみや秋をへて色もかたぬものよ
あるらん(同)序よろづの言の葉とぞあれりける(源 柏木)十聞えいづることのも
人よりのことかりしれそひかたちの 云々(同 夕かほ)十ましてさりぬべき御いとの
御ことのも葉も(同 若紫)卅いみよきことのもをつくしきこえ給へ(同 總角)九十お
ろりからせことのも葉をつくり給へ(同 夕霧)七言のまのおほく哀れよもをりう
もきこえつくし給へ(同 権本)卅打とくとあけれとさきよよりいすこ言
のまつけてものなどの給へるさま(後) 戀二 右近「おもさんとたのめしひとありと
さくいひしことのもいづちいけん(大和物忘れしとたのめし人ありとさき) 源 桐壺十いせつらゆ
きよませ給へるやまことのもをももろここの歌をも(万代) 冬 伊勢「紅よそらそ
ぬ庭のなりよけり悲しきことのもとのつもりて(隆信集)「色とよ身よむこと
のまかれどもふりきあさきのしるしをりぞ 此つげ此集 よおほし

ことのもより(後拾) 雜三よみ 人しらす「とへがいかいくよもあらト露の身をまそも
ことのもよやゝると

ことのもとめ(源 橋姫)卅けよその人の上ときりんとよ哀がるべきふることをも
をまして年頃おやつらなくゆりういかりけん事のもとめよと

ことのはり 外うつは 樓の上 下七くくらべ奉らせ給ふようつくしあてよけさ
りき事のいとことの外よあらぬを子よひきつれてみんぞおもたしく覺えたま
ふ(源 あふひ)十五かの御息所 云々さげなごことの外にのおせよとせ(狹)一上、
ことの外よ手もふれ給えねいとりをりりのことへもおもせよとありつれ
ことの外にこそありけれ(同)三ノ上、をらでとける人かへりさやうの事、またお
らもせよとことの外よの給ふを(同)三上、今すこちちづき給へいせさらんこそ
ことの外よの給へせつれどもとて(源 夕きり)十え見せとをいへどことの外よてよ
りふさせ給ひぬ(同 みのり)二廿をくよりよもおせされせがらことの外よそれ
られしくおせよとらることおせりる(發心)七此法師武者よあふてこのとのまの
いらる御歌の出来てよべるよと問ふわれらしきのひとのまよてもいりまの
ことの外よ(同)廿七年でろおやつらなく思給へることをもるけよをらせやといふこ
との外よおせゆれよのつねの人のやうよあひらふほどに(宇治拾)三物見ね
どうづさくふたおほはれきぬをよことの外よあり(同)七ノ子孫出来てこと
外にさりえさり(新古) 雜中 宜秋 門院 丹後「山里のよのうきよも住よびぬことの外よ
嶺のあらし(源 常夏)十九女御をせりいとさことの外よ侍らん(夫)十八「よさ

の海の冬のしる風雪は吹て事の有りたる浪の音哉(宇治拾)四つくりたる田のよく

でこかたよつくりたるよも事の有りまざりたりければ

ことのをたつ(蜻蛉日記)上「かき人のおとづれもせそ琴の緒をさちし月日ぞりへ

りきよける

ことのもえせざりなり

○ことかよむは(源花の宴)七さてさえかんとし思もぬけしきかりつるをいりかれ

はことりよむはべきさまををしへせかりぬらんを(同蓬生)六まれよもことかよ

ひ給ふべき御あたりをも更まかれ給ひ

ことのもり(千載)戀二「かれてのちつらからまよくらぶればなき名のことのか

せをらぬり(新後撰)戀三「あふまでのおもひのことの數をらでわりれぞこひ

のそとめかりける

ことのもよ(源蜻蛉)十とのよことのもよし申させ給ひて

ことのもついで(後)春春の日ことのもついでありてよめる(源夕きり)五十あたらう

打とけ給もざりしうとをりあき事のついでよおのづから云々(同紅葉賀)卅さてそ

のちのちともをればことのもついでことよひひむらふるくさそひなるを

ことのおこり(源桐壺)三もろこしよかゝることのおこりよこそ世もとぞれあ

りりけれ(榮みこてぬ夢)四ことのもさまのもことよりよからぬことのおこりなればそづ

りしうおせされて

ことのもころ(源薄雲)七上の夢の中よものころをしらせ給もぬをさ

はがよくるしうみ奉らせ給ひ(同夢の浮橋)十よべ大將殿の御使よて小君やまうで給

へりし(同明石)八さふらひ給ひて對面して事のころとり申さんといふ(同繪合)

十昔の上手ともものとりよりけるよ延喜の御てづら事のころろりせ給へる

(同あてふ)廿ことのもころある人のすくあうて

ことのもさま(源夕きは)廿かさをりよてへさてあらんもことのもさまたがひたり

ことのもみされ(源夕きり)六十事のもみされ出さぬる後我も人もよくけよあきたしや

ことのもも(後漢書)五十具知事本

ことのお布き(源玉葛)卅つぎとししうころるえん人あどもことのおほりらでつれど

よ侍ると(同浮舟)卅ひさしかりつるそのおこりあそなたまふもことのおほりら

せ(同さわらひ)十ことおやくもあらせ云々などきこえおきてたち給ひぬ

おとおこなふ(源 玉のつら)四十人せうがへ事行ふ身とされるいそよきめい

くとおもひけり(源 玉のつら)四十人せうがへ事行ふ身とされるいそよきめい

こどく(源 玉のつら)又もとのこどくよりへり給ふべきさまとあゝるくるべきま

まよいのり申給ふ(同 玉のつら)下ノえ思ひのこどくもあへてりこのこどくかんい

もひの御たち参るべきを(古)敏行(源 玉のつら)「こどく物やりかきほとぎは時ぞとも

かくよたどかくらん(同)難おのがおもひの雪れこどくかんつめれるといひけ

るをりよよめる(拾)戀五よみ(古)躬恒(源 玉のつら)「我をりりこれをおもせん人もがさても

やうきと世をこゝろとん

こどく(枕)十一さやうの方より更よえさふらふまよき身よかんをべると申し

る(枕)十一さやうの方より更よえさふらふまよき身よかんをべると申し

かん少一口をしき(同)三。雪山の殿もり司の人よて御きよめよ参りたるなどもと

かよりていと高くつくりかす宮司かと参りあつまりてこどくをへこどよつくれは

(源 神)四十 御返もさこえさせやらせ給えねば大將ぞこどくをへきこえさせ給ひけ

る

こどく(他國)宇治拾(四)土佐國とたの郡(云々)おのが國よあらでこど國よ田を

作りけるが

こどぐさ(源 玉のつら)上九あけくれのこどぐさ聞えそべり(うつ)下ノ大將

の酔ひよたるうかどりかくいふ(大將)ゑもぬ時もこどぐさかれは皆人耳かれたら

ん(同)中 更あることをもよまふりかこどぐさよもわらひたまふものを(伊勢

物)(百八)哥 云々 常のこどぐさいひけるを聞りける男歌 云々(枕)四 わざと思ひ

たちて宮づらへよ出立さる人の物うがりてうるさやよおもひたる人よいそれむ

つりしき事もあればいりでりまりでかんといふことぐさをして出て親をうらめい

ければまよまわりかんといふ(源 桐つや)七 朝夕のこどぐさよぬとあらば枝を

りまさんとちぎらせ給ひ(同 玉のつら)五 われはすれせかどよとものこと

ぐさよなりて(同 火)初 この頃世の人のこどぐさ内のおやいと、今姫君

とことよふれ(相摸集)「菅原やふしとおさるのこどぐさようちまらるゝことや

何かる(拾玉)百首(同 哥合)山「山里よとひくる人のこどぐさこのすまひこそう

らやましけれ(扶桑拾葉)十八(うた)ねつきせぬ泪の雫のまどうつ雨よりもかりい

とせめてこびもつるかぐさよさそふ水たよあらそと朝夕のこどぐさよなりぬる

を(補)行宗集「あそれてふわがこどぐさをとりつまばいく車とも忘れざらまし

(山家)上「かきとたるこゝろやせめのこととさひあそれく」とかたくたたりぞ(枕)
十一ノぎやうでんの一のさかにといふこととさひ頭中將こそ給ひり

ことやうかる(拾)下雑つゞこの瀧といふ所を見まかりりりけるよことやうある法師のよと侍りける(源あけまさ)四ことやうかる女車のさましてかくろへいり給ふ
一(同)六十。心。わがあまりことやうなるぞや

ことやおれらる(源あふひ)廿ちもくの夜なりけれどかくこりなき御さそりなれば皆事やおれたるやうあり

ことやおぶり(榮わら枝)十衣いなつやつをさよやすりらぬまとおもへハ中宮大宮などよのみを申おらせていととき折ふしにもたゞむつとささめ申るをあやまらせ給もぬよ此宮こそおとやおぶりよおそいませ

こととまぎる(發心集)六若き女房のつが装束さるが涙おさへつ、向をたりにさたせむありけり人々あやう思て事まぎる、日おればわざとたづねとふ人なり

こととませ(源稚う本)廿その故く、情ある方よことをませ聞えんもつきあき身のありさまともなれば(同)下女ぐくよえことませでかんよ夕まけるとつたもらん名こそをいけれと笑ひ給ふ(同行幸)十何よさまでこととませ侍りけん

と人おろろくい思給へてかん(同)梅うえ)十かやうの事のかこき御をへたよまさがふべくもおおやえざりりりバことませまうけれど

こととぶき(源初音)三これこととぶきせんと打わらひ給へる御ありさまを(同)八こととぶきのみざりがそしきをこめきたることととくとりなしたる(同)竹川)十三

盃をのみを、むきばこととぶきとぞにせんやとむづりめられて竹川をおかトこゑよいごしてまごどりけれとをりうたふ(西宮抄)踏歌立御前奏壽詞(孟)うたふ

詞の終りてとよ萬壽樂と唱るかり

こととく(源玉葛)廿この三條がいふやう大ひさよのこととくも申さトあが姫君大貳の北方あらば當國の受領の北方よか奉らん(玉うづらの事より(榮楚王夢)外に申さト也)一

たゞ此宮をさかさ人々の御ありさまどものえこそいとくろくろくろくしけれこととをみんなとおもそまをあらめ(源御法)廿今の蓮の露もこととくよまぎるま

トく後の世をとひたえちよ覺したつこととさめみな(同)廿八尼君よのこと

ことよもか、せ注尼公への何フモ不書也(同)廿あか心うとてこととくよひまぎらそ給ひつ(万)五貧弱ぬのか衣ありのこととくきそへとも(神代紀)下

「沖津鳥嶋着島よわがぬ妹のわ素羅ト世のこととくも(同)紅葉賀)五 こととく

目もうつらせ(うつら)藏開中ノそれをさへなんこと(一)此朝臣聞えさせ承

れよとあんあり大將ノ(同)初秋二六こと(一)よとり申さんとあるをいそぐこと

侍をばあんとていそぎてさつ(同)國讓下一日のこと(一)よと思給ひしりと日のく

れよしうばあ(同)樓の上下ノこと(一)よもかくおもひまどふ人をかのきくれんよ

のゝる事をし給ひを(同)上云々との給ふまよあき給ひぬべければこと(一)よ

まぎらひし給へば(源少女)八いまよりたよ用意し給へとさりりよてこと(一)よ

ひかし給ひつ(躬恒集)下四一本の菊にのあれども露霜ぞわけてこと(一)色に染

ら(貫之集)(後)春上(六帖)六くれなるよいろとわりへて梅の花香ぞこと(一)

よよほとざりける(元輔集)(後拾)春上梅の花りのこと(一)よ匂をねとうはくこと

こそ色に咲けれ(六帖)五おまつどりかもつくしまよ我いねし妹のよそれよの

こと(一)よ此哥古事記に(古)冬「梅の香のふりおける雪にまがひせば誰りこと

ことよきてをらま(續後紀)十九如是鎮留事者每事雖劣每物(万)卅一今の世の人

もこと(一)目の前よ見さりゑりたり(宇治拾)四慈惠僧正戒檀ヲノツム勝なほこ

と(一)あるべからせ戒檀をつきて給へとありければやすき事とて(源夕霧)十

そのきと心もえをさめあふまどくをらぬこと(一)と(一)からぬ心づりひもから

ひそとむべう此こと(一)のらぬこと(一)ら(同)夢の浮橋)十こと(一)よのみづりら

さふらひて申侍らん(古事記)余能許登基登邇世ノ限(万)廿二よるのよのことこ

とひるのよ日のこと(一)貫之集)「さくら花ちらぬ松よもからそなん色こと(一)

よ見つ、世を徑ん色のあらむ限(同)手ならひ)六十君ぞこと(一)きよあせせける

(万)十七越の中くぬちこと(一)山はしもあまよあれども(伊勢大輔集)「霧まよふ

秋のそらよのこと(一)よさつともえぬ戀のけふりを(月詣)一賀茂紅梅白梅よほ

ひことならせといふことをよめる「梅の花いろこと(一)よよゆきともよひひこ

りぬものよぞありける

こと(一)かく(蜻蛉日記)中只此頃のこと(一)かくかくればいひくるまをけきて

こと(一)源あふひ)十親さちのいとこと(一)しう思ひまどむる、が心ぐる

さよ(同)東や)四是よりまさりてこと(一)しう死きその人(同)帝木)一光る源氏名のみ

こと(一)しういひけたれ給ふとがおなりあるよ(枕)三もろこしよもこと(一)しう

名つきさる鳥の(同)系合)七おとこの下ます、め給へるやうやあらんこと(一)しう

召よはあらで殿上よさふらひ給ふを(同)蓬生)九あまよくこと(一)しうや(うつら)樓

の上)上、四必かの日いりんこと(一)しうからせ中々しらぬやうよてものせられよさ

とがしきやうかり(同)下四大方までいづりからせむればこそむかねて高き
さまかる物たてさせとべるをいりことしくしく人の奏するにや侍らん

よとよ(源 竹川)六右大臣のこととよ御き御をどまてついでなき對面もかた
きをかどの給ひて云々(同 桐壺)廿すべていひつゞけばこととよ御ううまでぞあり
ぬべき人のありさまかりける

こととよ(古)誹諧 遍昭六「秋の野はなまめきとてる女郎花あなこととよあしのま古花も一

時補こととよ(源 わのち)廿八あともとよ上しくおもふべきまもあらねど(同)四十
御いづらひかどのおとよ御しくよどけくうるそ御きま

あとこのむ(重之集)十法師のことこのむが歌のうへにおそくすれば「口なや君
がそのにいけるらん色めくなりまいらへせとや(後)二雜いたく事このむよを

時の人いふとき高津内 親王「かなき木まがれる枝もあるものを毛をふさきまを
いふがとりあき(同)三雜ひがきのおうかの歌の左注りこに名高く事このむ女にな
んとべりける

ことこのみ(源 東屋)三ことこのみとよ源とよりのあやうあらりよるかりび
たるこゝろぞつきたりける(同 夕のほ)六男の田舎ままりりて女かんじりく事この

とてはらからか宮仕へ人よて來りよふと申
こととよ(ろなく)うつは(吹上)十一まつりたことこのついでに語り申しを承りよと
ととよろかくてよるをひるよなしてかんいそぎまりうて(同 藏開)中興ある所を
ばけうと給ひをりきとバ打笑のせ給ひつゝあと御心をくきこいめくくら(同

俊下そ某所あらでいあらとと思ひてこととよろかくなるべ(源 ちらひ)十姫君
をおきたてまつりて世よこととよろおもせとどいふ(古事記)上ノ無異心(伊勢

物)廿二をとこととよありてりるよやあらんとおもひうたがひて
こととよ(源 未摘)廿九是のいと聞えさせよくかんといたうこととよめたれば例のえ
んかりとよくみ給ふ

こととよ(源 帚木)十文をりけどおやどりよこととよをいそむつきのりよこゝ
ろもどかくおもせつ(同 やとり木)卅詞宮されどまこととよろよくまのお
ければいとこゝろやすいとくこととよりてきあゆとよいとるるべきわざ
ぞ

こととあり顔(六帖)二(伊勢集)「うぐひしのなくねをまねよ山彦をこととありがほよ
もとめつるりか(後)戀一よみ八しらす一とるときのこととよかくとぬとき事ありがた

こととあり顔(六帖)二(伊勢集)「うぐひしのなくねをまねよ山彦をこととありがほよ
もとめつるりか(後)戀一よみ八しらす一とるときのこととよかくとぬとき事ありがた

こととあり顔(六帖)二(伊勢集)「うぐひしのなくねをまねよ山彦をこととありがほよ
もとめつるりか(後)戀一よみ八しらす一とるときのこととよかくとぬとき事ありがた

こととあり顔(六帖)二(伊勢集)「うぐひしのなくねをまねよ山彦をこととありがほよ
もとめつるりか(後)戀一よみ八しらす一とるときのこととよかくとぬとき事ありがた

よこひしきやかぞ(源 若紫)卅。ワカ紫ノチ夜ふりう出給ふもことありが不ありや

(同)三此人と事ありが不しやおももんかどあいかければいさうかけりしけはも

いひかさぎ(同 くてふ)廿「打とけてねもとぬものをわりくさのおとありが不しむ

そぞゝるらん(同 わかぢ)下八。小侍人々のまゐりしに事ありが不しちりくさふ

らハトどささりのいとをさし心の鬼はさり侍りしを(同 夕きり)十あさましや事

ありらほよこけ侍らんあさ露のおもそんよ

まどありて(玉葉)五事ありて伊豆國はかたされ侍りけるを云々法印忠快

○ことしもあり顔(源 夕霧)七人々の何りのりよき、給ひても事しもありが不

よどかく覺しみたれん

ことあらため事改(源 夕きり)八七十事あらためて後いいとたまさりよつれかくかり

まさり給ひて

ことあやまり(源 竹川)二十今のかゝる事あやまりよをさかうおふけかりけるを

づららの心をもどろしくかんと(同 夕かは)四ちひさき子どもあさどの侍るがことあ

やまりしつべきもいひまぎらひして(同 梅あえ)十「花のりをえあらぬ袖まうつし

もてことあやまりと妹やとがめん(同 藤のうら葉)初しのおとをれど内々のことあ

やまりも世よもりよたるべし

○事のおやまり(後)雜四よみ「あさごとよみしとやちのたえぬればことあやま

りよとふ人もかゝる

ことあけ揚言(前漢書)六十西域傳烏孫國揚言母家匈奴兵來故眾歸之(後漢書)三十竇

融傳揚言東方有變西州豪傑遂復附徒(補)万)十三あきつしまやまとのくよの神から

と言學せぬ國しりれども吾のことあけす(同)十あしそらの水穗國の神をがらこと

あやせぬ國しかきどもことあけぞとがする云々言上はこれ(同)十二「大りたの何

りもこひむことあけせむ妹よよりねむ年の近きを(同)十八「どが布りしあめいふ

りきぬあくしあらばことあけせむともしりさるえん

ことあひたる(源 葵)廿若ぎみのいとゆゝしきまでをえ給ふ云々ことあひたること、

ちしておとむもうれしういとどおもひきこえ給へる

ことさら(躬恒集)卅「ことさらにしかん事こそかたりらめいきてりひかさきものお

もふ身(同)九「あどさらし我のまつらんことさらりらさしてこふべき人のあくど

も(家持集)六「万)卅五」ことさらし衣のすらト女郎花さりの、花は匂ひてをえん(續)

(小大君)廿「續後撰」戀五、三條院「あどさらしうらむともかゝ此頃のねざめをりり

「らせて」が(大和物)三忠岑。「かさぎのわたせるもの」の「もの」をよそよそ

みさげことさらよこそ(源柏木)十かう昔おやえたるみゆきの「よこ」はまりをもえ御

らんせられぬらうぐわいさの「ことさら」まゐり侍りて「あんと聞え給ふ(同手習)」十四

八まどひてきてみる「吾御うへの衣けさかさをことさらせり」とてさせたてまつ

りて「うつつ」樓の上上、かくておほくもひきからひ給ひぬべけれどことさらよこ

日一二三ををへ奉り給ひつゝ過し給ふ(白文)八何煩故揮弃(源松風)二あさ

ましうおやゆれさいま事さらよと打けさやぎてまゐりぬ(同初音)十御こゝろよあ

らせうちあひかれ給ひて事さらよみき丁ひきつくろひへどて給ふ(同帚木)十こと

さらよかさけなくつれなきさまをみせて(同あらし)八又やとえ給ふとことさらは

ぬいり給へどさらよ御めもあひで

ことさらめく(源梅の文)十歌かともことさらめきてえりかきたり(同夕のほ)十さ

ふらひわらひのすがたこのましうことさらめきて(同)十いとことさらめきて御

さうぞくをもやつはたるりりの御をを奉り

ことさらび。ワザトメク心也(源帚木)卅。眞名ヲ假名ニこゝちよのさしもおもそ

ざらめとおのづりらこそとよき聲よよみかされかどいつゝことさらびふり(同)

五卅さすかよ一のびてわらひなどおるけそひことさらびふり(同)十世とかれたる海

づらかどよそひうくれぬり云々いとちるどいつゝことさらびふり事也(同橋姫)

五卅かとのおろしきぬきぬきせしてことさらびき給へり(同あふひ)九えせ受領の

娘かどさへ心のかぎりつくしたる車どもよのりさまことさらび心々さうゝるお

んをうしきやうゝのそのものかりける(補源行幸)十さくらの一たがさねいとなが

うしりひきてゆるゝことさらびる御もてか

ことさま(狭)四卅例の姫君の御うたよ聞え給ふやうかれとことさまの心もそひた

るべし(同)四十一のさりりまでと奉りそめてすくせなさいふかるものゝことさま

よかり給ひいあすすべき(源葵)十五今のことさまよわくる御心もあくて何り

いりむりりそどり、める世よかくて思ひさごまをなん(同神)廿かたちのことさま

よてうとてけよりそりて侍らる(同とめ)卅殿のことさまよ覺るることおそ

まはとも

ことさま(源紅葉賀)五りへりてい事さましよやありけん。事ザマシトハ源ト頭

ト人ノ舞タルハ事ザマシトハ源ト頭ト人ノ舞タルハ事ザマシトハ源ト頭

源ト頭トノ舞コケオサレテ見ルニカラヌト云。細流ノ説(同花の宴)二十いつりれ入

ことめく(源さあき)七 やうくあけゆくをらのけりきことさらまつくりいでさらんやうなり云々まいてとりあき御心まよひもよ中々事もゆりぬよや哥云々の明景よあへの瘧ト東坡もいへり

こと一(源柳)十 ことごとくと打つぎ

こと一おひ(拾)賀盛 云々うぶやの七夜よ「こと一おひの松をかぬりよ成りよけりのこりのほどを思ひこそやき(堀太)竹「こと一おひのまがさきもどのくれたけ

も秋のよながかりやいぬらん(新續古)夏後小松院「こと一おひの竹のさえさのま

くろよよ葉分の月も見るなどぞあき(新後拾)戀忠「今年生の竹の一よもへどつればおぞつらなくもありまさるうを(貫之集)「こと一おひのよひ桑まゆのから衣千

世をうけてぞいとひをめたる(元真集)人の子うとたる七夜よ「かねてより千とせ

の松ぞおもゆるまたふたさること一おひの松(齋宮女御集)「こと一おひのみ

りこれ池のあやめ草がささめよ人もひりあん

こと一らふ(拾玉)五 建久四年十一月中旬ことよ月くまかりりよ箏琵琶をうきや

うかどうちて見どもの遊びたりよよみさり「月も冬木のもいまいあらよ

り松のまひとりこと一らふなり○明阿云事知合也○雅云案琴調ブニハアラジカ

ことトけ(續後撰)夏前太「露むをぶまがさよふりき夏草のあよともあよこと一けのまや

あといやく(源薄雲)五 万の事おしゆづりきこえてこそいとまもありつるを心ぞを

く事一やくも覺されて(詞花)雜下増基法師「我思ふことの一けきよくらふればのど

の森の千枝の數か(後)雜一、嵯峨后「事一けいをさしつてれよひのまよおくらん露

いぞ、さらさん(古)戀四、よみ「夏引の手びきいとせくりりへりことおけくとも

さえんとおもふな

こと一のあけ、ん(古)戀四、よみ「梓弓ひき野のつむら末つひよわがおもふ人よあ

とのあけ、ん

こと一もこそあれ(狹)三十四 下只今我みつれたること一もこそあれといりぞりか

か一と覺えざらん

あとひろこる(源總角)五十 いと一のびてと覺せと處せき御いきりひかれればおのづ

から事ひろぞりて(同)鈴虫、六 俄よさん事ひろぞりける

ことひと 他人(源夕顔)五十 右近のこと人なりければ(同)帚木、七 こと人のいんや

うよ心えおおせらるゝとて中將よくむ(同)東や、七 こと人の子も給へらんともど

ひき、侍らざりつるかり異父ノ(同)十母あるものもこれをこと人と思ひよけさる事
と(伊勢物)九父のこと人よあはせんといひけるを(同)十五あてあることをこのみ
てこと人よもよぎ(源夢浮橋)十あと人よのうへのおのづからやうくさけと

ことひのう(万)十六無著作歌「わぎもこがひとひよおふるをぐろくの事負乃牛
のくらのうへのりさ(和名)十特牛俗語云古度頭大牛也(夫)廿七「こととくこと
ひの牛のつのさきのさきありみるもおそろの世や信實

ことよなき(空穂 吹上)下。行政詞 何事ぞやきみの御耳よいり給ふの事もなき事
からん(同)上あまたが中よことよなき小鷹ひとつあん侍り(源夕きり)五十御息
所のことよかりり一人のひ心ばせまかん志さう打とけ給ひざりりさそり
かき事のついでよおのづらら人の用意のあらはるものよあん侍るときこえ給ひ

て(同)こてよ六西のたいの姫君よともなき御有さま(同)よき(二)手つき口つき
皆さどくからせみき、わたり侍さみるめもことよなく侍りりさ(抄)ホメマ
ル詞也異モナ(同)をどめ十。明石上ナおいの世よもさまへらぬ女子をまうけさせ

奉りて身よそへてもやつるたらせやんことなきよゆづれるまろおきてことよ
かりるべき人ありとぞ聞侍るを(空穂 俊蔭)上あやしくめでさき人よ心せそ

かるをまひするりかどと給ふよ打あゆまくるうしろであとよか(同)忠こそ八よ
きやどあるわらひよてあをひいとくことよなきいろこのよよておひいで
云々(同)七りくあやしき人のいりで時めき給ふらん猶見給ふよことよなき人と

こそみ給へつれ(同)廿またらひのついでよも事もなき人なれば思ひうむせべき事
もあらト(同)藏ひらき下、四をべてちくさのさざよのつねよよせりさちもいとこと
もな(同)若菜上ノさえかどもことよかくつひに世のうためとあるべき人なれ

バ(同)手習卅。大尼詞おうかの昔のあづまことよおそひことよかくひきまべり
らと

ことよもの 別物(枕)廿一。尼乞食ノことよものくひで佛の御おろしをのみくふがいと
さふとき事うかといふれしきをえて尼詞などりことよものもさざらんそれがさふ
らねばこそとり申侍れといへバ云々(同)手習卅あづまのうらべをつまさをや

よあらぶとかことよものハ聲やめつるを
ことよおろり(千載)冬俊頼(散木)「秋の田よ紅葉ちりける山里をことよおろりよお
もひけるりあ(抄)山里トイヘバコトモオロカニアナドリ思ヒシニ秋田ニ紅葉チリタ
ル風情哀ニ面白キトナリ(拾玉)二蓮「池水よめでたくさけるそちをりかことよお

増補新編言集類聚 卷之四十一

ろりにこゝろかくらん補(宇治拾)九もいさもやとおもひていひとゞめてよびよ
りつるかりといふよこともおろりかり

ことせくか(源さうき)五四十世をおもひまゝいさるあまぎみたちのみるらんもそい

さかければことせくかよいで給ひぬ(同 帯木)十いきのいさよひきいれことせくな

かるがいとよくもてかくはかりなり(同)四ことせくかよてとろくまぎらひつゝ

どりのくし給ひつ(狹)四中十二さうきことそのいらへもまれくし思ひの外よ

どりあしてことせくなよいらへかい給ひつゝ

こちありコナタ(重之集)六「うぐひせの聲よよされてこちくれバものいさぬをかも人

まねきけり(同)三「むしのねれかなしき野べの花すゝきこちふく風よ打あびりあ

ん(六帖)五笛「から竹のこちくこのゑもきりせなんあなうれしとおもひしるべ

く(同)「ふえたけのいけれつゝみん遠くともこちくてふかひわをれざらん(榮

つほみ花)二此頃土御門どのわたらせ給ふべれバ云々それも東三條院よいでさ

せ給へりしをそこのやけしりバこちよわたらせ給へるなりけり(明月記)天福二

年八月六日亥時斗人々云々宮もこちくしと被仰聊御違例云々(千載)誹「ふえ竹の

こちくとかよゝおもひれんとかりし音のせしよぞありける(源 若紫)三十宮よ

あらねさまおもやしをかつべうもあらせこちどの給ふをまづりしり人どさ

はがし聞かして(同 あうし)八廿こちまゐらせよどの給ひてわさり給せん事をバある

まどうおやしを(同 夕きり)八五十こちわさり給ひし時御こゝちのくるしきよも

御ぐしきなでつくろひおろし奉り給ひしを(同 うき舟)七四十母ぞこちわたり給へ

る補(狹)上四おそくの見えつればこちまゐるべきりとしてあん

○補こちおしあちおし(宇治拾)十一、つとひさるものどもこちおしあちおしひい

めきあひたり

でち(源 帯木)一哀とも打ひとりさるゝよ(同 少女)十大将内大臣にかり給ひぬよ

の中のことどもまつりでち給ふべくゆづり聞え給ふ(同 帯木)九かこしとてもひ

どりふさりよれ中をまつりでちおるべきからねバ(同 夕のほ)二云々どひとりでち

(同 帯木)八廿わが二つの道うさふをきくとかん聞えでちまべりしりと

こちかせ東風(空穗 祭の使)六十「大りたれりなとみつゝこち風のふく木がくれと

おらせぞありなる(人丸集)「わたつこの沖よこちりせをやららしかのこまざらよ
かきたりくみゆ(馬内侍集)「こち風よこのこゝるくて橘のされめしおとのすぎぬ
める哉補○春海云東風とこちりせとよめる事此哥をどそとまりしやあはふるくも

あるりこちのちの風の事をればこち風とはいふべからむといふのかへりて誤かり
あらゝのしも風の事あるまあらゝの風といへりおかト類也(玉葉) 戀三女御「こち
風よかびきもてぬあまぶねの身をうらむつゝこがれてぞふる

○こちのりへ(後拾) 兼五、兼俊母 「まほひきや都の花のあづまぢ此こちのりへ風の
につけい

○こちふくりせ(狹)四 「ひとつづまひおこせやへさくらこちふく風のさよ
りすぐさむ

補こちよりて(榮月の宴)一此いさいかまつくればべきまあらむこちよりてのこを
ぞしるをべき

こちよくあくせ 五濁(狹)三上。大将ノサマ目もあやまめでたき御りさちを打ま
悪世(狹)卅六。タイフ所ニ りつ、けま此五ちよくあくせまはあまらせ給ひけり(同)三下 五ちよくあく世を
とくまぬりきて

おちとう(狹)四十八下 つねよりも御いのりともおちたうせさせ給ふ(同)一三 母宮
世ノイトフヲ 案ノ玉へバ たまふれのすさびもおちたうむつりうさへおせざるればいづちり
まよりいせんと申給ひて(同)一上 髪ノすそのやがてういろとひとく引れいきて

おちさうた、おそりたるすそのそぎすゑ 云々(同)わうな)十八 霜のいとこちたうお
きて

おちたく(源みのり)十御ぐりの只打やられ給へるぞどこちさくきよらまて(源を
とめ)四殿まりで給ふけむひこちたくおひのゝゝる(大鏡)三又例も御供ま参り給ふ
御子供の殿さら又例も御供ま参り給ふ上達部殿上人引ぐさせ給ふればいとこちた
くひゞきことよておそいまれを(空穂 櫻の上)上五 ものすそよままりる髪つや
つやとしてそそをからせ又こちさからぬほどよて(源 寄生)一昨五日中より例を
らぬさまよあやまらう給ふ事もありけりこちたくゝるゝがりをどい給おねど

(万)十 おははともふらぬ雪ゆゑこちたくも天つとそらなくもりあひつゝ(源 常
夏)十御ぐりのぞどいとかがくこちたくのあらねどいとをうきすゑつきあり(万)
六 十二 「人言のまことこちさくかりぬともそこはさそらんこれからなく(同)卅三
こちたくのともりもせんを ふるくハ言痛ノ心ニ **補**(源) 下五 あまりこちたく
ものをこそいひかゝ給ふべけれ

こちたき(万) 二ノ十四 但馬皇女 「秋のされをむきのよれるかさよりま君まよりな、事痛有
登母○明阿云こちさの言痛ノ心ニテひつこいうるさいくといかといふ心(源 葵)十二

御ぐいといとかりうちちと死をひきゆひて(同 蓬生)八ちちた死御ものつゝとかれバ

(同 御法)四御うとく爰かしく御誦經やうもあかどさりりの事どうち給ふど

ま所せさまましてその比この御いそぎを樂人舞 人等也つうらまつらぬ所をけれバいとこ

ちさき事どもあり(同 やとりき)七十殿上人などいとおほくひきつゞき給へる御い

きはひちちたきをみるよ(同)

(同)「人ことをいけとちちみあもざりきこゝろあることなおもひ

わがせ(同)「ひととををたみこちちとおのよよいまどとらぬ朝川わたる

(補)「人言ををたみこちちとわがせをめまのえれどもあふよしもあ

(同)「源 夕のほ」廿長生殿のふるきためいのゆゝくしてをねをういさんとい引

りへてとろくの世をぞりね給ふ行先の御とのめいとちち〇契云万ニ言痛トモ

事痛トモカキテ多キ詞也其意ニカハル所アリ人ノ言ナイタムト事々シキヲ事多キ

トナリ今ハ事多キ心ニテ大キナル心トヤ注ハ叶ハザルナリ或云万葉ニ人ゴトノ

シゲミコナタミトヨメルヨリ物語ナドニハラウガハシキコニイヘリ(六帖)上六「あ

りねさひひるのちちたあぢさゐの花はよひらよあひきて一がが(續故事談)二も

ト唐へ御使まつりのさるゝ事もぞ侍るとてりの國の詞をからひて侍るかりと申さ

れけり遣唐大使の用意いとちちた

(同)「源とし姫」六けとひいやしく詞とてちちたよものかれさるいとも

いくて(古事談)二天性無骨者ニ候間幽玄ノ處ヲエ舞候ハヌナリ(同 手あらひ)四

三いびきの人のいとくおきてりゆなどむつりきことどもをもてとやておま

へよとくきこめせかどよりきていへと云々いひていふもいとちちた(類聚新

例)被始吉事御祈之日奏復任事甚無骨

(補)「ちち」此方來「ちち」の所(後拾)「いつりまたちちくかるべきうぐひそのさ

へせりそめよその笛竹(公任集)「月影よちちくの聲ぞきこゆかるふりよ妹ハ

待やりぬらん

(補)「ちち」右(大和物)三むねつおれてちちこといひて文をとり見れバ

(同)「ちち」狭(三)下まぎらのに扇を打からして猫をちちくとの給ふよよりきて

らうさけかる聲よてかきつゝなづさふ

(補)「あちく」(万)九云々さきたるのちり過まけりふゝめるのさきつぎぬら許智

期智乃花の盛よ

(同)「ちちく」土佐日記下舟君のやまうともとよりちちくしき人よてりうやう

のことさらしらざりたり(源玉葛)廿 八 かさちのいとくめでたくきよなげらな

かみびこちくしうおせせましうに玉の鍛からま(同初音)三十 ちくし

くさすがまわらひ給ひて(同朝うほ)三 聲ふつゞりまこちくしく覺えたまへるも

(同としひめ)四 卅 よづらぬひとりさまよてこちくしうぞあらんと(同)廿 七 ふるもの

がたりまかづつらひて夜をありしもてんもこちくしうるべけき(源總角)九

いとまをゆくありつらぎむしあきこちくしきよて(源紅葉賀)卅 人まよさしよりてものかくしり給ひぬらん

(こり)こる戀。伐木人まよさしよりてものかくしり給ひぬらん(源紅葉賀)卅

うしとていとねさけある尻目なり(落窪)二 かの車のくちのうたよよりてこりぬや

といひてこよ(源帚木)十 八 いりてこるをりのわざよておどして云々我まよささ

心ならばおもひこりあんと(同空蟬)十 一 あやふかりけりといよくおぞしこりぬべ

し(同あふひ)五 十 いとあやふくおもほしよりまたり(同あさひ)十 六 「つれあさを

むらしまりぬまゝろこそひどのつらさまをへてつらけれ(後)八雑二よみかきから

ぬとおもまてよの山高きあやきを思ひこりぬる人しらす「よの山こえ

んことこそかさうらめこらんなきのりむらりかん(宇治拾)十二 木をこりて親

ぞやしがふ云々舟は木をこりて入てゐるされ(千載)十三 かねてよりおもひこ

とぞふし柴のこるをりあるをたきせんとい(古)大輔 「かきこる山といたり

くかりぬれつら杖のみぞまづつうれなる(同)人しらす 「かききをばこりのとつ

とてあり引の山のうひなく成ぬべらかり(神代紀)五 上 皆是潮沫凝成者矣(万)九 卅 川の

氷こゞり(伊勢集)十 一 ひとたびよこりよ梅の花なれりちりぬときけと今見か

くよ(同)八 十 一 をへてものいひとさりける人云々「このめつあをぞとふる

いつそりよこりぬこゝろを人しらすかんうへし「夏むしのゑるくまどふ思ひを

ばこりぬりかすとたれりみざらん(兼盛集)廿 二 「さだまよこりに君がまひてひ

を何とさしよりまたのきませる(忠見集)八 一 「いくそたび春れさくらよこりぬらん

あまの色のまたのめられつ(良玉)孝 善 「根山こる賤の男のまああらぬともあらぬ

嘆きを持どくるしき(宇治拾)六 一 木こらんことどもをれていへまうへりぬ(金葉)

戀下よみ「さぐるめるおどのよきのおほけれぞをらあきをばこるよやあるら

ん(新後拾)冬 行 家 「ふりつめる上葉の雪れ夕をりにこほりてかゝる松の下露(拾)秋 雜

貫之 「ひとりぬくくるしきものところりよとや旅あるよしもゆきのふるらん

(補)こり(山家)下 熊野 二 「あらたがる熊野まうでのゑるしをばよりのこりあうべ

補こり(新後)戀二「いとがねのこりく山の苔蕈ぬるよもあしとあつくころかあ
資季

こりさて(狹)二下「今なりやうの方まことよこりたてぬる心ち給ひて
十三

こりともこりぬ(後)戀六よみ「我さめよかつつらしとをやま木のこりともこり
人しらす

ぬかゝるこひせト(宇治拾)十四人をころはことこりともこりぬ
十四

こりぬ(後)戀三典侍「夢またよまつとのみえと偽よこりぬ心のわれさへぞうさ
親子朝臣

補こりさく(新葉集)賀冷泉入道「いろいろも千世までよへもよきやこりさく
前右大臣

梅の今さりをかり(續後)春上凝花舎の梅さかりあるを「いろくよこりさく庭れ
みてよみ侍りける前太政大臣

梅の花いく代の春を匂ひさぬらん

補こりさくもな(和訓栞)「梅をいふといへり凝花舎の義うめつを凝花舎とい
ふ意なるへい

こりくもな(新後拾)序藤原あまねき御うつくよみ凝く花よりもかうさく深
良基

き御惠きよくをさく竹よりもさく

こりせ(陽成院哥合)「とととよとまらぬ秋とよをさがらをしむころのこりせ
もあるりか(亭子院有心無心哥合)「とととよとこりせやあるらん織女のあひてこ
ひさきわりさのみさる(方)廿八「我やとよからあるまればおろりれぬれとこりせ

でまよもまろむとぞおもふ

こりせ(源若菜)六十五「志づみよわをれぬものせこりせまよ身をあげつべきや
どのふぢかよ(同)「身をあげんふちもまことのふちからでかけしやさらよこりせ
まれば(元真集)廿「こりせまよをほりへるり玉ぞこの道ゆくすゑよみゆるもの
りな(拾玉)二虫聲「まつむしよもの思ふそでの露にかけをこりせまのさくひよ
増戀

もせん(後)戀四よみあざよをえける男「こりせまのうられをみたちいで
よるほともかくりへるをりり(同)貫之「風をいさくゆるけふりの立いで猶
こりせまのうらぞこひさ(源夕のほ)四十なほこりせまに又もあざのさちぬべ
九

き御心のすさびかめり(同)末摘「二らうたなならん人のつよまきことかりらんみ
つけてしがあとこりせまよおろしわさば(兼盛集)廿氷もたるあした人「冬の
よのそでのこほりのこりせまよこひさ時ねをのぞかく(信明集)廿七「こりせ
まよたゆるまもかき水ぐきのなくくかける人ぞありける(古)戀三よみ「こりせ
人しらす

まよ又もかき名のたちぬべ一人よくからぬ世よすまへ(大和物)二「こりせま
のうらよりづかんうらみみるのかみささくありこそいせめ(六帖)三三「若らか
みの立ささくともこりせまのうらのみるめいからんとぞおもふ(源すま)廿四「こりせ

まのうらのみるめい(源澤標)十こりせまは立ちへる御心をへもあれど○契云こり

せまのまのゆふまぐれのまれをどく助字也○文詞にいへるこりせま(檜垣集)よ

こりせまよみたりける(かほろふ日記)中おもふ心をせまをる下後拾義四

「みやま木をねりをもてゆふづのをいあふこりせまのこゝろとぞみる(續千)四雜

時元「あられ下を海人のもい木こりせまはあふたもえの絶ぬおもひ(新千)

戀三爲氏「こりせまよさのとなふれを今こんといひてむか木き庭は松風(方代)戀二新少將

「こりせまよいくさび床ををらふらんさためてこぬの今宵のそりの(陽成院歌合)

「こりせまよあひもみるり女郎花とまらせりへる秋とあるら(千載)戀二重保錦

木のちづりまのぎりなりりせばなふこりせまよたてまし物を○源釋(新)今夕顔よ

物ぞりし給へ空蟬軒端萩よ猶忘を給ぬの又もあふを立給ふべしと也おぞい

出るよにくからせといひて古哥を引面白云々万葉卷十五よあふせまよしと也

ふも只不逢しててふ意といふ人ありさる意との誰も見れを猶まの語助辭とも聞え

せこりせまひの畧なるべしいせ物語よせまふ力ありといふよ依るよ一度ありさる

ことよ猶すまひつよりて物をなれをいふ也(釋)この説にいふあらんされどまの

義にいせ思ひえを猶考ふべし後撰集よ貫之「風をいさくくめるはふりのたちい

で、あふこりせまのうらぞこひしきこれの須磨の浦よいひりけたれば論あり

こぬれ(万)五十六「もるさればこぬれかくりて鶯ぞあきていぬかり梅がしづえ補

(万)十七、長哥 あし引の山は許奴禮よ白雲よさちたをびくと(同)六長哥云々あま

よの許奴禮をなさせ

こをどこ 小男(千載)雜中前中まご小男に侍りける時をトめて昇殿申させ侍りける

を云々(榮さま)八 宮々いとうつくしきこ男どもよておそしませ

こござり(竹取)十。 姫詞こござりよかの給ひを屋のうへよをる人どものきくよ

とまさか(狭)三、上けしからせこござりよなどやうよえ給をかうしよえ覺し

さトをもとよりいといふがひをかきやうよおしせし(空穂)藏開上ノ寅の時さ

りよ生れ給ひてこござりよあき給ふ

こごぞえもせせ(聲絶)堀太(喚子鳥)「こたへぬにかよよはがら呼子鳥こごたえも

せせかくよりあるらん(宇治拾)二、千手陀羅尼を片時やむ時をか打ぬる事もせ

せ物もくせ湯水ものまでこごたえもせせ誦し奉りて此ひつぎをめぐる事三年よ

かりぬ(同)八、まよかよとよりつづくと夜一夜いもねせこごたえもせせよとよ

りせけり

こごづりひ(源 若紫)六うちいでんこごづりひもそづりいければ(同)九御もてか
こごづりひさへめもあやかる(同 朝うは)四いたうをけとよたる口つき思ひやら
る、こごづりひのさはぐは舌つきよて(同 夕霧)八四十志のびやあるこごづりひか
どをよろしうき、か給へり

こごづくり(うつろ 俊蔭)中立よりてこごづくり給へば此うつろはの人、琴を引やみ
てあやがりてと給へば云々(同 國讓)中五御とのでもりなどを程打こごづく
りしてそんわうの君のこゝよりどの給へば(源 末つむ)八ちりぐをからとて御お
くりよともこわづくらぞ(字鏡)欵志波不支 己和豆久利源夕のは廿七隨身も弦打してたえき
こわづくれとおほせよ(同 さあき)廿たゞこゝよりもの申さふらふとこわづく
る(補 榮月の宴)五十うちこわづくりて申いで給ことぞり(源 花散里)三こわづく
りけしきとりて御せうそこきこゆ(同 楨柱)十を、のう聞えてこごづくりあへり

こわづくろふ(十訓抄)然間上東門院立后の後始て入内の時云々有國砌よさむら
ひけるが少こわづくろひたりければ殿下御覽トやりければ指をさして上長押
を見やりけり(古事談)六有國砌ニ候ケルが頗ユロツクロヒ申タリケレバ

こごつき(狹)四上かへはと申あぐるこわつきのいと神人ノたのもいけかれど 祝ノ詞

こごぶり(うつろ 祭の使)廿大君まさばといふこごぶりよかううさひ給ふ歌云 左大

將のぬー伊勢の海のこわぶり歌云 同 菊の宴六十一「ゆふぐれのみがきよまねく
袖みきばさぬ、ひきせーいもくとぞ思ふ〇いもが門のこごぶりよ北の方聞給ひて

こごさま(源 常夏)廿あごつけきこごさまよのたまひいづることは
でりい五戒 源わのち下七いむ事の力にもやとて御いささきあるいさりりはさこ
て五くいをりりうけさせ奉り給ふ

こがる(れ 焦 六帖)露よみ八「夏の日よこがる、山の草かれや志さーの露よこゝろ
やるらん(夫)八好忠「下紅葉あきもむらかくいろづくひてる夏の日よこがれさるり

も(曾丹集)「すくもたくみすの浦人ふか、きていくその夏をこがれ來ぬらむ(後)
離(伊勢集)廿舟よてものへまかりける人よつりいける「おくれぞ心けのりて

こがるべき浪よもどめよ舟見えはなど又これの涙を海となくつ、こがるよ曹を空穂
菊の宴卅三「わがでとや春の山べもこがるらんかきさのこのめもえぬ日にな(源

楨柱)十よべのいやけとほりてうとまけよこがれたるまひかともことやうあり
同(柏木)廿七世のことわりかうつらいおと、こがれたまへど何のりひあ(拾)雜賀

重之集「春のよえ秋のこがる、かまど山

【こがる】戀に（後）戀五よみ「きえせのみもゆるおもひの遠けきと身もこがれぬ

る物よぞありける（源あふひ）七たぐひかくおせしこがれたり（同桐壺）八なきこが

れ給ひて（同帶木）廿をりくひとやりからぬむねこがる夕もあらんとおせ侍

る（同蜻蛉）四こがるむねもそこさむるこちいさまひける【万】十一「あ

びきの山田もるをぢぐおく蚊火のいたこがれのみこがこひをらく（續後紀）承和

九年七月乙卯ノ詔ニ晝夜止无久哀迷比焦禮御座爾

【補】こがさか（散木）「こがたかれつりのまよさあそやどおもふ身をいもさやの

さくべき（夫）

【こがね】（神代紀）上ノ韓郷之島是有金銀五

【こがねのいけ】金の池（赤染集）「大井川ちろくてらせる月をきてこがねの池とおも

ひこそやれ

【補】こがねのきぎす（夫）寄柴戀「つれもあき人のこゝろをとりしをにこがねのきぎ

はつけえていかな○貞丈云鷹の鳥ニ春ノ雉子ノ女鳥ヲコガネトテ賞翫スル

ナリ

【こがねのもと】金の（續世繼）一こがねの文字の御經とりと御とづりらかせ給ひて

【こがらめ】（山家）「ならびゐてともををかれぬこがらめのねをら頼むしひの下

枝（行宗卿集）寄鳥戀「たちのけさうへあらびぬるこがらめをつれあき人の心ともが

な（拾玉）四「春さても見より一人の山里こがらむれる梅のたちえを

【こがら】（六帖）一上「こがらし秋の山風ふきぬるとかど雲る雁のこゑせぬ

（續古）秋上規子内親王家但馬「あさぢふの露吹むすぶ木がらしよまたれてもあく虫の聲りか

（千載）秋上俊頼「木がらしの雲吹さらふ高根よりさえても月のまとのざるりな【補】（新

勅）秋下家隆「故郷のとりさきが原のそし紅葉あゝろとちらせあきのこがら（詞花）秋

「萩の葉は露ふきむすぶこがらしのおとぞ夜さむよなりまさるる（玉葉）雜一「も

のおもひよけあはけぬべき露の身をあらくあふきをあきの木がら（續古）秋上大

「きゆるごよをいけよゆる秋そぎの露ふきおとけこがらしの風（新古）冬雅「秋

の色ぞもらひもて、やひさりとこの月のあつらよこがらしの風（後拾）秋下山家の秋風

といふこゝろをよめる大宮「山里れあづの松がきひまをあらまいたくあふきをこ

がらしの風（順集）歌合の中むしの「あさぢふの露吹むすぶ云々此哥露吹むすぶこ

がらしのかど雨を時雨とやいふべあらんといふをさこしめしてこれりれゝるこ

どをいふことをいさめしはひりめとて「木がらしの秋の初風ふきぬるよあと

か雲るよかりのおとせぬ 又こがやどのとさ田もいまだからなくよまどきふきぬる
こがらゝの風いひたるわたりいひなれさるあどさたむる程よまさち申様木がら
ゝとの冬の風をこそいへ此頃の風をいも冬のあらゝを秋のそつ風といへるよや
あらんそのわたりをこそさどめ申さめとあるよつけてまゝくゝと給ふれば「かく
むゝのなまたまかせせる露よりも露ふきむすお風のまされり云々

こがくれ(千載)夏 宗家 「夕月夜いるさのやまのこがくれよのりよかのる郭公りか

(古) 雑体 忠岑 「君が代よあふさり山のいそゝとづこがくれよりとおもひけるりな(伊

勢集)四十 「こがくれてさつしまつまの郭公まゝしき不どのこゑをきかむ(後)夏

勢 「木ぐくきてさつしまつとも不とゝぎすそねからまゝし枝うつりせよ(頼政集)

下ノ 「人ゝれぬおちやまの山守のこがくれてのそ月をみるりな(月清)二

廿四 「秋風のなをゝ草よこがくれて森のうつせみこゑをまゝしき

こがけ(堀次)常陸 「思ふさちこのもかのもよ群あつゝ夏にこりけぞ立うりける

こがめ(古) 雑上 敏行 「玉されのこがめやいづらこよろぎのいその波わけ沖よ出よけり

(金槐集)下 「玉されのこがめにさせる梅花よろづ代ふべきのさゝなりけり

こがひ 子飼(枕)二 心ときめきする物、雀の子がひ

補こよ(万)十五 「さびよて妹よこふればほとゝぎをわがすむ里よこよあきわゝ

る 從此間

こよあく 格別。アレコレクラ(源浮舟)十。中君ト浮舟 あてなる所いかれいといこ

よかゝこれのさむらうさけよこまりある所ぞいとせり(中務集)廿東宮の殿上

人扇奉るよ「こよあくもけふのすゝきさもとめあふく風さへあはれよかりつゝ

(空穂 藏開)中、四 それの年のこれよこよなくこのけみよてぞおせし大將殿の君よ

ちの云々(同 吹上)十六 男女など人のこよあくまさり給へり(同)十六女の中よ九よ

あさり給ふかんいとこよあく物ゝ給ふ(同 藏開)下、四 限りなくめでたくとえし君た

ち此今とゆるよあまはれればこよあく劣りそゆ(同 吹上)下、四 左大將殿の春日よて

給ひしあそびをかんめづらゝき心ちせしそれよもけふのこよあくまさりてなんお

もほゆる(同 あらし)廿 人の御ほどわが身の不と思ふよこよあくて心ちあゝとてよ

りふゝぬ(同 浮舟)廿 大殿の君のさかりよ句ひ給へるあさりにてのこよあかるべき

やどの人を云々女ゝ又大將殿をいときよけに又かゝる人あらんやとみりかぞこまや

らよ句ひきよらかることこのこよあくおそしけりとする(狭)上、御まをつらつさか

ぐと給へる御りなり天人のあらび給へるよもよひあいさやうこよなくまさりて
めでとまき御聲して(源 手習)三十四宮をすこしも哀とおもひまきこえけん心ぞいとけい
からぬ云々こよなくあきよさるこゝちをコレ句宮ヲ輩君ニ宇治拾十五むけし物
もおほせられぬおほくおほしつるよこの僧めをほどの御氣色およなくよろしく見
えけれバ

○こよかう(つれく)五つくくと一年をくらを不どごよもこよなるのとけいや

ひ(同)十三段ひとりともい火のもどよふとせひろけてとぬ世の人を友とするこそこ

よかうなぐさむわさかれ(源 桐つは)廿おのづから御心うつろひてこよかう覺いお

ぐさむやうかるもあそれかるわざかり(同)廿そりあき花もみちよつとても心ざい

をとえ奉りこよかう心よせ聞え給へ(同 帚木)廿此さが物を打とけさる方まで

時々かくろへ見侍りし不どのこよかく心とまり侍りき(同 末摘)十六されくつがへる

今やうのよいさよりのこよかうおくゆりしとおがえわさるよ補源朝のは廿わ

らむべおろして雪まろばいせさせ給をりけかるすがたのらつきさども月よとえ

ておろさやりよなれたるがさまのあこめみされきおびしどけあきとのるすが

たなまめいさるよこよかうあまれるかこのすゑしるき庭よいましてもてこやいさ

るいとけさやりかり(同 御法)三おやいとごほる不どまたごうちあさへたる思の

まへの道心おおそ人々よのこよかうおくれ給ひぬべりめり

○こよかう(枕)九ノ女の鏡視こそ心の不と見ゆるかめれおきぐちのそざめし塵る

かと打きてさるさまこよかう(源 松風)七わそれぬ人も物し給ひけるまたのも

いさといふこよかうやわれも思ひあきにいもあらざりしを

○こよあき(源 帚木)廿こよあきとぞえおろせさる物しなしてながくさるやうも

侍りあまし(うつ不 俊蔭)下六男君ウツホノ女君ニこよあきほどの事をればかく

の給をさるもおやつり。かから夢のやうよかんさもやありけんとをりり覺え侍る

○こよあけるべし(源 帚木)五人の品さりく生ぬれば人ももてりしづりれてかくる

る事おほくゆねんよそのけもひこよあけるべし(榮 楚王の夢)三あそれし故院のい

とらまし(惠慶集)「あら玉のひとよさかりをへどつごよ風のこゝろもこよあかり

とる(源 東屋)卅殿こそあさやりかれとわらひあへるをさくもたよよなのみの不

とやとかあしく思ふ雅望云八雲御抄ニモ事正解よさるるものこい

○補こよあからぬ(紫日記)こよあからぬ御えひあめればいとゞ御いろあひさよ

夕はほり夕さあやみはあらまをいくては

【こよみ】五欲。色聲香味觸（父子相迎）上たゞ穢土の五欲とまゝかきものよして

【こよみ】曆（安法集）「まさよするこよみをとればかまが野のわりあつむべきほども

きまけり（夫）三月盡「けふくれぬ夏の曆をまさりへし猶春ぞとやおもひあさまし

（同）十八歳暮惠慶法師「まさよするこよみのこゝろもづりいくのこりのひらゝ老見えよけ

り（同）十八知家「ひとゝせのこよみをおくよまさよせてのこるひら老のそとぞはくち

き（りけろふ日記）中下見れば也この月日あまけりけりつきさちてとなんこよみ御

らんとてたゞいまもの給ひるなぞりいたるいとあやういあまやきこよみにも

あるうを（同）下御こよもちてもとよなりぬ云々

【こよみのむらせ】曆博士（源葵）十けふのよき日からん曆のむらせめて時とひせを

と給ふほどよ

【こよみのちく】曆の軸（榮とりへの）六長保三年十二月廿二日の事ありそとなどい

とと寒く雪をともいとさくふりて大方の月日さへよのこりすかく曆のちくあ

らひはかりたるもあそれるをまゐたるそとの御事あり（同）衣の珠八そよも成ぬ

れつこよみの軸もとちううかりぬるをあそれよおもふ程よ（夫）十八仲正「ゆく年を

曆のちくよまさよせて老とてよける身をかけくりか

【こよひ】（源桐壺）七けふとむべきいのり云こよひよりと聞えいそらせバ（允

恭紀）七くものおこかひ虚豫比あるも

【こよひ】古代（源薄雲）廿古代よ打しとぶきつゝ（榮見とてぬ夢）九十七日の程もまぎぬ

云々けよいりてとく御覽せさせを昔の宮達の五七までこそ御対面ありけれな

と祖父おとゞいと古代よおぞのどめ給へれと宮くゝの只とくゝいらせ給へと

いそがせ給ふ（同）八世のおぞえいでやけしうのあらんあを古代と聞ゆめれとさ

もあらせめやすくもてなくおぞめたり（榮衣の珠）廿五かこまりてと聞ゆると

そひもいとあそれよあざいかり（源末つむ）廿古代の故づきさる御さうぞくあれと

猶わりやりある御よそひよのよけかう（同）卅つゝみまころも箱のおもぞりよ古代

なるうち置ておし出さり（同）卅五こよひのおを君の御をぞりよてまぐろめもまど

かりけるをひきつくりのせ給へれば（源わらあ）上七むね打つおれてこよひのひ

がこよもや侍つらん（榮月の宴）卅二いりよぞやおもしてまここよひなるけそひ

ありさまして

【こよひ】五體（枕）六一むくろでめよより給へといふをこよひでめよとかんいひつる

といひて又わらふ

こたよ(源やどり木)七十いとけしきある深山木よどりたるつたの色ぞまどのこ

りたるこよなとまこしひきとらせ給ひて宮へとおぞくてもたせ給ふ(細流の類也)

(枕)三五草の部よこけこたよ(古)物名よくとに物別

またち木立源わの紫九四十庭のこた池のり(同)夕顔四廿こざちいとるとましく

ものふりたり(万)五三志まのこざちもかんさびまなり

でたち(伊勢物)九段宮づりへりける女のりたよこざちありける人ぞあひとりりり

けり(源)と、き、三十つりふ人ふるでたちあど

補あたる(万)三五一ひむがりの市のうゑ木のこたるまであひぞ久しみるべこひよ

けり(同)十四十六「たきまこるかまくら山のこたる木をまつとをぐいとゞこひつゝや

あらん

こざか(源蓬生)廿松のこたりく成よけるとし月のほどもあそれよ(後)雜一「ひ

きうゑし人のうべこそ老よけき松のこたりく成よけるりか(古)離別「音羽山こぞ

りくかきてるど、ぎは君がわりれををしむべらかり

こざれ〇をれこたれを出ス部よ(宇治拾)一四よお座の鬼盃と左の手よもちてゑと

でされたるさま

こぞま(和名)十一ノ樹神文選蕪城賦云木魅山鬼今按木魅即樹神也内典云樹神和名

(源蓬生)四 こぞまをせけしからぬ物とも所をえてやうくしりたちをあらそし(同

手習)五たどひまことよ人ありとも狐こぞまやうのものゝあざむきてとりもてきた

らんよこそ侍らめ(同)六あかさかなのこぞまの鬼やまさまかくれなんやといひつ

つ(同)六鬼り神り狐りこたまり(同)夢のうき橋)六てんぐまたまかぞやうのものゝ

あざむきゑて奉りけるにやとかんうけたまひり

こたふ答源夕顔)廿手た、き給へ山びこのこたふる聲いとるとま(竹とり)四

此山の名を何とり申せと問ふ女こたへていもく是ハ蓬萊の山かりとこさふ(同)五

翁あたふ詞云々どうあづきをり

〇こさへ答(万)十八山びこのこたへするまで(源)帯木)二親の家よ此よさりかんわ

さりぬると答へ侍り(古)戀一よみ「つきもあき人をこふとて山びこのこさへる

まであけきつるりか(竹取)四云々と申し御子答へての給そく詞云々(同)九をのこ

さもこたへて申せ(伊勢物)六露とこさへて消かましものを(神代紀)上陽神後和之

日嗣(後拾)神祇「いかり山みつの玉垣打と、きとがねぎとを神もこさへよ(千

載雜中「ありつきのあらうよさぐふりねのおとを心のそこよこたへてをさく

圓位法師 (拾玉)四「さゝのむる月よあたへて鳴鹿よ我もみりされ山此その空(同)二「ねざめ

せる心のそこのわりあきよこさへてもなくをいのこゑ哉

こどてをぬきとり(うつろ 藏開)上ノ藏ナ更にあくべくもあらせこどてをぬきわり

おほくの人々煩ふ

こたみ(源 手習)廿九こさみのさもありぬべしと思ゆるしてりへりぬ(同 東や)六十尼

君こたえのえ参らト(同)廿二こたえ心のどりに此御有様をみる(落窪)三こたえの我

御殿よとを引いれむらへ奉り給ひてなん(同)四御四十九日よありぬ云々こたみこ

そまてのことかれバとて大將どのいりめつくおきて給ひけり

これ(宇治拾)八これ人してとりよ奉らんをりよおこせ給へ云々心の中はおもひ

けるやうこれを司のりよ奉りてとこづり奉らんとおもひて

補これ(万)二「あゝ引の山行くバ山人のこれよえいめい山づとぞこれ(拾愚)

上「まぢろよ夢ともいそゞ世中のかくてきゝるもりなさをこれ(新千)賀周防

「千とせふる雲るよきさる鶴の子のまさちとむる毛衣ぞこれ(千載)神祇「をべ

らぎを八百万世の神もとなときまよまもる山の名ぞこれ永範

補これ(源 手あふひ)四十あやいこれの誰ぞとあうねけかる聲まで見おこせたる

(後拾)八雑二よみ「かたくりかつひよをまよきわられりのこれのあるよよとおもふ

をがりを

補これよよりて(續紀)廿五此仁依天(詔解)四ノ卅三

これよつけて(土佐日記)下風のふくまどやまねバ岸のかみ立ちへるこれよつけて

よめる哥

補これを(後拾)雜二「ありつきの鐘のこゑこそ聞ゆかれこれを入相とおもて

まゝくバ小一條院

これりれ(源 帚木)卅四いとあゝきことかりとてこれりききこゆ(大和物)一家よこれ

りれあつまりてよひより酒のみあさけ(源 桐つほ)廿五これの人の御さたまさりて思

ひかゝめでさく云々かれの人もゆるし聞えざりよ云々

補これりかれり(赤染集)一ゆふぐれのこせゑの床やまがふらんこれりかれりどか

くかられりか

補これぞかく(源 楨柱)四十これぞかくとめでさゝめきさわ々聲いちゑるし

補これぞこの(續拾)雜下「そりあさよいりでさへまゝおれぞこの世のこととりと

思ひあさぎバ(月清)下「淺茅原あき風たちぬおれぞ此かがめおれよをのふる
郷(和泉式部集)「これぞ此人のひさけるあやめ草うべおをねやのつまとかりけれ
(古)雜上(伊勢物)「大りたの月をもめでしこれぞ此つもれば人の老となるもの○
勢語新釋よ云これぞ此の俗語よこれがあのおよしとやといふ意なりと師のいそ
れさるが如し」

これら(源紅葉賀)六これらにおもしろさのつきよけきバあとくは目もうつら
でれう御料(長門平家)十御料のまわりたるうといへばゆふもけさもまゐらせさ
れども御さしとたよもさてさせ給ひせと申されバ(同)十「うち川を水づらよして
かさわたる木曾の御料を九郎判官

これやこの(後)雜一「これや此ゆくもりへるもさりれつゝあるもしらぬも逢阪の
關(伊勢物)十五「これやこのあまれ羽衣うべしこそ君がえれしとさてまつりけれ
(同)十三(後)雜三「あまはづをけさこそみつのうらでよこれや此世をうみわた
る舟(万)一十八「これやこの倭よしてわがこふるさぢよありとふかよおふせのや
ま(空穗 藤原の君)廿四「あれや此をいみ給ふ御むせめなめき罪ぞそりらるゝおろそり
なる罪を領せらるゝすぢろくのぬいたちといひて(万)十五巨禮也已能名よおふか

るとのうづりよ玉もりるとふあまをどめども(伊勢物)「これやこのこれよあ
ふみをのぐれつゝと一月ふれどまさりが不あみイ本よろしまさりのはある人といふをいひのこしたる也くとい
伊語新釋六(後拾)旅「これやこの月とるたびよ思ひやるをさえて山の麓あるらん
十一段可考為仲
(輔親集)「これや此神代ひさしくかりぬれどときをかたらぬすみ吉の松(續古)戀
親清女「これやこのあまでのうらよやくしほの烟さえせぬおもひあるらん(万代)釋
(家經朝臣集)「これや此手よとりからす人のみかよの佛よかるといふもの

見よまことよおそしとるいといへバ通カレニ
こを手習うつやなどのくそ。又人の名よこそと(うつは)たこそ○あてこそ(源
夕のほ)十北殿こそ聞給ふやあさいひかそほもきこゆ(同)十わらもべのいそぎへて
右近の君こそまづ物見給へ中將殿こそ是よりとたり給ひぬれといへバ(枕)四ノそ
こらの人のほめりんとてせうとこそきけとのさまひりバ(源)卅。紫上尼
ひ上こそ此寺よありし源氏の君あそおしとなれなど見給そぬとの給ふと(榮)三
ま(七)七みそのりたをさよりさし出させ給ひてやおとごこそと申させ給へバ(枕)
十一。方弘清人まよよりきてわが君こそまづ物聞えん(宇治拾)四地藏こそとたり

く此家のまへよていふかれバおくのりたより何事ぞといらふる聲すなり(源横笛) 十。句宮ヲサ 大將あそ宮いたき奉りてあかへるておとせと云々(落窪)一北方お 不きよそらどちて北詞おとゞこそ此おち窪の君云々(狭)二道成詞おとゞこそこれ 猶申直一給へ(宇治拾)十四 入道の君こそかゝる人のをりきものがりかども するぞり一(大和物)五壁をへどてたる男き、給ふや西こそといひれば何事とい らへれば(金葉)戀物へまりりける道よそしたものを逢ふりけるをとひせ侍けれ ば上東門院よ侍るすまひこそとなん申すといひけるをきゝて(宇治拾)十五 花あそ といふ文字こそナリハめのしらのかその名よつべれば(十訓抄)十一 宇治入道 殿よさふらひける嬉しきこそといふもしたものを(今昔物)廿四 父こそとよへバ 忠行何ぞといへバ兒のいそく○廣足云人よよふむり一何が一こそといひ一也 今の何が一さま何が一殿よ當まり(榮さま)おとゞこそ(源横笛)大將あそ云々 ゐておとせとみづからりよまりていと一とけあけよのさまへバ此こそも同言な りおとせのせり下知の辞よてこそ結びよあらせ

補こそ(小右記)藤原の小忌古曾といふ女の名あり

こそ 去年(源若むらさき)初こそこの夏も(同)さるき(四)こそこととちつゞき

こそ 是(貫之集)一時鳥なくとも忘らせあやめ草こそくまりびのゑる一かりける

補(公任卿集)「初雪もふりぬとかざりいむさらんこそと一つもるをトめと思へバ

こそ(枕)十二又小野どの、母上こそ云々哥云々とよ給ひけんこそめでたけれ

補こそむゆき(著聞)十 あやまご僧のわきへさ一入てける此僧こそむゆきまた

へぬものかりけるよや

こそり(六帖)二「わたつと都こそりきいよけら一世をうち山の神も見かくよ

(宇治拾)十六 人々こそりあつまりて迎よの、りきて(伊勢物)九段舟こそりて泣

まけり(榮花山)四十あさま一ういミトうて一天下こそりてよのうち一關々りよめ

さわぎの、一(同)うたのひ(六)よこそりて信せせといふことのとたひのやうかり

補(賀茂社歌合)祝部宿禰 成仲 「春ふりく成ゆくまよよ一の山こそるこそりて花咲よ

けり(宇治拾)終 京中の人こそりてまるをけり(うつや藤原の君)一せりいこそりて

申時よ(同)吹上(四)かこのぬ一國のうちをこそりてみおくり給へり

補こそこのふるこそ(壬二)中「郭公待よかさなる雲路よりまつねにりへるこそこの古

聲(古)夏よみ人「五月まつ山よと、ぎを打もぶき今もかりかんこそこのふるこそ

補こそけ(宇治拾)廿六すゞめ三斗桶とり入て銅こそけてくさせ(同)廿三明れの
こめくさせ銅薬こそけてくさせなど

こそく(宇治拾)九四法師こそくとて入くるまゝ目をいりらして(同)廿一
主人手をこそくととりて水精のまゝの緒されらんやうなる涙をもらくどこ
ぞいていそく(同)六蛇のゆくまゝひりれてゆけば谷より岸のうへさまこそこ
そとのぞりぬ

こそで小袖(盛衰)廿一兼隆紺の小袖上腹卷着て(無名抄)下月の哥水一られ
ぬ氷なりけりとよめりてをばこれぞ誠のぬまをよさるやどなるかま身命の衣ぬま
とて小袖よしてささるやうみかん覺ゆるとぞ人申侍り(義經記)一白き小袖一
りさねよからあやをさきさねとりまあさきのかたびらを上よめり白き大口よから
おり物のひさゝれめいあきたへといふ腹卷きこめよして

こそめのころも(堀次)元服もどゆひのこそめ糸をくりりへ衣のいろよひき
やうつさん(詞花)戀上くればなるのこそめの衣うへよらん戀の涙の色りたるやと
(夫)卅二洞院攝政紫のこそめの帯のうさむすびとけてぬる夜のかぎりいらせよ **補**(續)
古春上中務けふもまゝ人もとせやくれあるのこそめの梅花のさきりりを(同)
卿親王

同入道前野もやまもよほひよとりを紅のこそめのうめの花のいた風(同)戀一
太政大臣

こつさき(宇治拾)十五袖うちおろしてこつはき吐てるさりけり

こつちふ骨法(盛衰)三えふの官をけがを侍繩をつけんなぞ申行ひつることむな
ま骨法をあらざりけり禮をさしていへりこちあしもあふ俗
よ手の骨法をそるといへるもこれあり

こつさふ木傳(古)春下こつたへおのが羽風にちる花をされよおほせてこゝら
かくらん補(拾愚)下房一吳竹よこつさふ鳥の枝うつりうれいきふも友よあそい
れ(同)同もちさりこつたふ竹のよれほどもともふみいふいぞうれいき

こつなく(大鏡)三日高くまたれ奉りて参り給へりけまをこゝこつかくおぞい
めさるれど

補あつくる木造(うつち)俊蔭一あしきさまのがれんとてまくりこつくれるを云々
木をとりとりいでとりあつくるひさま

こづめづ(平家)廿一黄泉の旅出給はんのちのまづめづの責をばまぬれ給むト
ものを

補こづと(万)廿五一なり江より朝しをみちよよるこづみりひまありせばつとよせ

まゝを(同)十九廿九よる木積なほよらむ子も(同)十一云々木積なほとも(同)十一廿五

「あき風の千江のうらまの木積なほこゝろのよりぬ後ハ一らねど

こゝろをいたしてつりうまつる御法業障はるゝかきやうのあらん悪靈あくらうのあふ

ねきやうあれどつりやうよまつそれるもりかものありと聲のくれていりり給

ふ(玉葉)釋教云々 我身の業障おもき事をおそれおもひて云々

こづせん源東屋廿やくこゝろせんかともとりわきての給へるこづせんたん

とりや(法華經)是人現世口中常出青蓮華香身毛孔中常出牛頭梅檀之香

こねりの著聞十八詞十四哥モ

こか(源)空蟬六紀の守の妹もこかたよあるがこれよかいまみせさせよとの給へ

そ(源)もふは十まづこかたれこゝろをこていとおぞを程(同)玉葛廿三こなたよ

うついで奉る

こな年月ノイツ頃源柏木廿七此二三年のこかたかん云々(同)あし七かこき

御りけよわりれ奉りにこかたさまくりなき事のおほく侍れば(同)柏木初

ひとつふたつのふいこと身を思ひおとしてこかたなべての世の中すさまトう

思ひかりて(同)わかあ上八何事をも御心とおぞりまへざらんこなたともかく

もそりかくあり侍りな(信明集)七十「神代よりいむといふある五月雨のこかた

よ人をとるよもがあへ一五月雨のこかたかもあふこといいつもいむとぞ

人いふある

こかりかと源末つむ十そのちこかたよよりふまとやり給ふべ(同)

夕は九きぬたの音もあすりまこかたりかさきわされ同東屋七こかかな

さよいとりうおもひければ万三四此方彼方も君がまよく源桐つは五えさ

らぬめごうの戸をさしこめこかたかかた心をあせせてまさなめわづらせ給ふ

時もおりり(古)戀一よみ「かさ糸をりかさこかたによりりはてあませい何を玉

のをよせん(万)九六此方カ彼方ニ造置有

こかたまくら(狭)ハ四中御丁のをさる屏風よりのぞき給へばこかたまくらよてよ

く見ゆ火をつくとととかがめつとをひふし給へる

こかたさま(源)花の宴五こかたさまよくるものり榮とりへの九ゆきのかたた

れふるまうちりへりみつとこかたさまにおませし御心ちまいとかしくおぞさ

【であう】御惱(榮月の宴)廿御惱まことあいとどければ宮たち御りさく皆涙をあがし給ふもおろりかり

【こかま】(神代紀)古奈瀾(和名)二前妻(和名毛)一云(古奈美)大和物(四)男も来りけり此うまかりこかみひと日ひと夜よろづの事をいひりたらひて(古事記)中(古那美賀那許波佐婆)

【こかま】(著聞)廿ノ如法經かゝんとてかうそをこかして料紙すきける時(うつろ俊)五かうべつとへて木をきりこか

【でらん】御覽(源さかき)廿御覽せで久くらんやど(同)桐つは(三)いそぎ参らせて

でらんせさせ給ふ(同)心ややくもでらんせさせ(同)夕きり(一)これよりかれきぎ

たる事い更し御心ゆるされで御覽せられ(同)藤の末葉(五)おとゞの御前(かく)

かんとてでらんせさせ給ふ(同)七いりよでらんとあそことりの侍らん(同)玉葛(卅)

いりででらんとつけられんとおもう給へ(同)桐つは(七)かのおくり物でらん

せさせ(同)浮舟(七)大きおまへの御覽せざらんやど(同)でらんせさせたまへとてかん

(同)とゞき(四)御覽ト所あらんこそりたく侍らめ(同)夕のほ(五)四十つをかくのみも

てかして御覽せられ奉り給ふめりいと語りいづる(同)桐つは(五)いとゞあそれと

でらんとて(同)六でらんとざ送らぬおやつりなさせいふりたなくおせさる(同)

七きえ入つゝ物し給ふを御覽せらる(同)八とこのかくてもいとでらんせまわしけ

れば(同)若紫(十)でらんとゆるさるゝちたも侍りたなれば(古)離(仁和のりみどみ)

こまおそいまいける時よふるの瀧御覽トまおそいまいて云々

【こらす】(源末摘)廿ものおもひいらぬやうある心さまをこらさんとおもふぞり(同)帝木(一)廿

【こむ】(こめ)の所見合ベシ

【こん】(源末つひ)五まろうどのこんと侍りつる

【でん】(權)新古(神祇)八幡宮の權宮よて年久しかりけることをうらとて云々

○でんの北方(榮さま)廿御めりうどの内侍のすけの覺え年月よをへて(權)の北方よて世中の人をやうふしさて司召の折のさ々此局よ集る

【こんんり】(混本歌)奥儀抄(一)混本哥つねの哥の一句なきなり七字五字心よまあり

安部清行朝臣哥云「あさがほのゆふりけまたせちりやまき花のよぞり又五句の

躰あり「岩の上よねさはまつがえとのとこそおもふこゝろいあるものを上(拾玉)

四ノ「うさものと我心をばおもひのぬるりひのち君を久しくまもれ
廿五

こんるり(名義集)瑠理此云青色寶言金翅鳥之卵殼鬼神得之出賣與人名紺瑠理

補こんりき紺搔(拾玉)四「こんりきのあるこんのあさ死せとほしてなまよくほり
や此世なるらん職人盡歌合紺搔とて一十をそめよとおほせらるゝ

こんがう(慈恩傳)三又西南行六七由旬云々正中有金剛座賢劫初成與天地俱起據三
千大千之中下極金輪上齊地際金剛所成周百余步言金剛者取其堅固難壞下零金剛金

中精宇者也即取堅固之義

こんがう(源わう紫)廿こんごうのせいのたま(義楚六帖)寶玉珍奇の部は金銀

の間に金剛子を載たり此外は金剛樹といふものあることをしるせり

補こむりひ(万)十天漢已向立而(同)八「やその川こむりひたちてそのこひけな
がさこらがつまとひのよぞ

こんよ來世(源夕顔)廿「うさをくがおこふ道をあるべまでとんよも深きちぎり

たがふ(古)戀一よみ「こん世よもそやなりなはんめのまへまつきあき人を昔と

おもそん(新六帖)(夫)戀「いりよせんこひとおもひと身にそへてこん世のさき

ぎけつりたもあ光俊

補こむらさき(元真集)「こむらさき君がむすびもどゆひのちりうちそらふぞ
までやこぬ(清正集)「こむらさきむりいの色もあせきて立りへりつゝふ藤

かみ(上東門院菊合)「こむらさきやほそめたる菊の花うつろふ色とされり
らむ

でんく金鼓(文粹)十二金鼓銘菅三品善哉金鼓微明光明(いはぬ)つゝみのもと

よて京極の院のつひちくづれ馬牛いりたち女どもかど笠をきてでんくうちありく

を見るよ(拾)雜でんくうち侍りける時煙やき侍りけるをきて長能「かさ山よそ

とやくをのこかのとゆるみやまさくらひよきてまたやけ(枕)六侍ひめきて細やり

かる物かど具してでんく打こそをりけれ(和名)三最勝經云妙幢菩薩於夢中見大

金鼓和名比良加補(江次第)三ことある佛事に樂人物の音を發せんとて圖書金鼓をうつ又

唄師音聲を發せんとて金鼓を打といふ事見ゆ(文德實錄)十四天安二年五月癸亥陰

陽寮云々始置漏水糺院外漏刻之誤但無金鼓今云(壬生寺)鰐口ノ銘奉鑄顯金

鼓一口云々(兼載雜談)云でんくうつどの神を請いおろし奉りて物をいろくよ祈

る事也今もそやうもん一のほることあり(新拾)上百寺の金口うたせ給さんとて云

こんやこト可來哉(後)戀六讀八不知「夕されば思ひぞけさまつ人のこんやこトやの

不來哉

定めなければ

こんどるり金銀(空穂 吹上)下、こんどるり志やこめかうのおろ殿をつくりりさ

ねて(本草綱目)八 時珍曰按魏畧云大秦國出金銀琉璃有赤白黃黑青云

こんてい(新猿樂記)凡廳目代若濟所案主健兒所補(平家物)こんていこらの健兒童(書紀)健兒

こんどやう紺青(更級日記)ふとの山の云々さまことある山の姿のこんどやうをぬ

りたるやうあるよ(蜻蛉日記)中、山をかがめやればこんさうをぬりたるとりやいふ

やうよて

補 こんひら金毘羅(古史傳)十。日枝山の云々さて後よ最澄法師が延曆寺を建る時

よ大已貴神の七名を取て七社を作りいと異なる名ともを付て各本地佛をさへよ付

たるが天竺靈鷲山の神を金毘羅神といふ由よて大宮神と其よ配て金毘羅神とも号

たる由山家要畧記と云を始め彼ノ方の書等よ見えたり是より大已貴神を金毘羅神

と申すこと始て今時めりは讚岐國の金毘羅神と云も實の大已貴神よ坐よ彼祠

の事記せる物に見えたり(玉さね)五ノ卷四十二云々 彼象頭山といふは彼山の別當

金光院正傳の秘書といふ物を鈴木隆彦といふ人よ借りて見たるよ元コトの琴平といひ

て大物主の神を祭れを佛書の金毘羅神といふよ形勢感應似たる故よ混合して

金毘羅と改めたる由を記せり此の比叡山よ大宮とて三輪の大物主の神を祭りてあ

りたるよ彼金毘羅神を混合せること山家要畧記よ見えたるよ倣へるよ然きバこ

そ金光院の傳書よも出雲大社大和三輪日吉大宮の祭神よ同トといへりおろ此後よ

白峯よ坐よ崇徳天皇の御靈と配祭せるよ一世の人あまねくいふの然もありあんそ

の其靈應あり一事實どもを聞あつめ考ふるよ崇徳院の御稜威よ思ひ合さるゝ事の

多りれば幽よむねと金毘羅の名を負給ふは此御靈よ然きバ金毘羅と申す名こそ

梵語かれ神實いいともやことおき神よ御坐せバ畏と奉るべき事よこそ俗の神道

者修驗者かどの言よ金山彦命と云ふの金字より思ひつきたる杜撰よてさらよ謂か

き妄説也

補 こんぢこんぢ 義經記よざうり いま誤てこんさうといふ九州よて武者わらトと

いふこんがうわらざうり也 比叡山の安然僧正作り初といふ

へんうひもてのちいし出以出の空無體用明證時下もふ
神平無定別同
神出よてと 心を好うさ入すこと心ん大快して玩香のさす
神出
 清静無言の言し金山道清の法より金華を思心のち大と林樹をちちて清
 實無言の轉實の心とさうもも轉と轉とさね事へち事しうと給言の轉世
 變くひの轉ひひの金山無の言の清静の轉世時證を空無なる金山無の事と各うす
 へ其證明の時と事さすも問ひて答ふるも樂論の論證思の合さるる神の
 白華と坐と學問天皇の轉世の證明するも神出の入る事なるの神の轉世なるも
 金山無の證明も出雲大坂大坂の證明日吉大坂の證明を問ひて答ふるも神出の
 ありとて金山無の證明も此合さるるも山家城皇臨上皇の證明も神出のありとて
 金山無の證明も山家城皇臨上皇の證明も神出のありとて金山無の證明も神出のありとて
 金山無の證明も山家城皇臨上皇の證明も神出のありとて金山無の證明も神出のありとて

增補雅言集覽卷之四十終

